

## 本学職員表彰を実施 「総長主催記者懇談会」を開催 北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）の実施と合格者の発表

お知らせ

・被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに





日本留学フェア



マネジメント能力開発ワークショップ  
「プロジェクト・マネジメント入門」

## 1 海外オフィスとグローバル教育推進センターについて

### 全学ニュース

- 2 本学職員表彰を実施
- 2 「総長主催記者懇談会」を開催
- 3 NHK Eテレ「新世代が解く！ニッポンのジレンマ」の番組収録に協力
- 3 第7回さっぽろ環境賞生物多様性保全部門地域賞を受賞
- 4 北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表
- 7 北大フロンティア基金
- 9 平成27年北大ペンハロー賞授与式を挙行
- 9 留学生センター日本語研修コース修了式（2015年10月入学者）
- 10 平成27年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催
- 11 タンザニア連合共和国ダルエスサラーム大学で「日本留学フェア」を開催
- 12 北海道大学ザンビア同窓会を設立、ルサカで同窓生懇談会を開催
- 12 北海道地区国立大学教養教育連携実施事業FDフォーラム「発展する遠隔授業」を開催
- 13 シンポジウム「FDの実質化に向けた協力体制の構築」を開催
- 14 平成27年度第2回「北海道大学TF研修会」を開催
- 14 マネジメント能力開発ワークショップ「プロジェクト・マネジメント入門」を開催
- 15 「グローバルファシリティセンター」の設置及び「キックオフシンポジウム」を開催
- 16 「第7回北大発ベンチャー促進懇談会1月例会」「第8回北大発ベンチャー促進懇談会2月例会」を実施
- 17 平成27年度「北海道ビジネスフォーラム～ふるさと応援～」(名古屋地区)に参加
- 18 セミナー「本場の本物をオホーツクから～北海道大学同窓会の食品産業エルム会からのご提案～」を実施
- 19 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで第28回「赤い糸会&緑の会」を開催

### 部局ニュース

- 20 教育学部がロシア・サハリン国立大学教育学部と覚書を締結



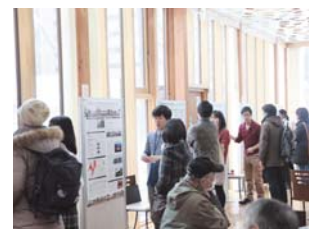
教育学部  
ロシア・サハリン国立大学教育学部と覚書を締結



水産科学院・水産学部  
平成27年度外国人留学生送別懇談会



低温科学研究所  
大雪山で18年ぶりに雪の観察実験を実施



総合博物館  
卒論ポスター発表会

- 20 教育学部におけるESDキャンパスアジア・プログラム2015全日程を終了
- 21 平成27年度水産科学院・水産学部外国人留学生送別懇談会を開催
- 22 先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2015」を開催
- 22 薬学部で第18回生涯教育特別講座冬季講演会を開催
- 23 農学研究院で「北海道に即した中核的林業技術者育成プログラムの開発事業」に関わる実証講座と成果報告会を開催
- 23 観光学高等研究センター、メディア・コミュニケーション研究院でジョイントワークショップを開催
- 24 低温科学研究所が大雪山で18年ぶりに雪の観察実験を実施
- 24 低温科学研究所でスノーランタンによるライトアップを実施
- 25 総合博物館「卒論ポスター発表会」を開催
- 25 附属図書館「第4回国際協力カフェ@北大図書館」及び「青年海外協力隊50周年記念展示」を開催
- 26 附属図書館本館で北海道地区機関リポジトリ実務担当者研修を実施

### お知らせ

- 27 共済組合員の皆様へ  
被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに

### 監事退任にあたって 29

### 定年退職を迎えるにあたって 30

### 諸会議の開催状況 48

### 学内規程 49

### 表敬訪問 50

### 人事 51

- 52 新任教授紹介



## 海外オフィスとグローバル教育推進センターについて

副学長 てら お ひろあき  
寺尾 宏明



昨年4月、海外オフィスと留学生センター担当の副学長に任ぜられると同時に、古巣の理学研究院から国際本部に異動して約1年が過ぎました。この1年間を振り返りつつ、私の担当する仕事について述べさせていただきます。

### 海外オフィスについて

北海道大学は、これまでに4つの海外オフィスを開設しました。開設順に、北京（中国）オフィス（平成18年4月開設、平成27年9月から運用停止中）、ソウル（韓国）オフィス（平成23年4月開設、車 柱榮所長）、ヘルシンキ（フィンランド）オフィス（平成24年4月開設、成田吉弘所長）、ルサカ（ザンビア）オフィス（平成24年4月開設、奥村正裕所長）です。カバーしているエリアは、各々、中国、韓国、欧州、サハラ以南アフリカとなります。

海外オフィスには多くの機能がありますが、中でも重要な機能のひとつとして、北海道大学交流デーの企画・実施があります。交流デーは、現地オフィスと国際本部が協力して、現地の大学等において、近隣の学生を対象にした広報活動を行い、優秀な留学生の獲得を目指すものです。併せて、本学と現地大学等が複数の分科会を持つシンポジウムなどの学術交流を行うこともあります。今年度、私は、江原大学と忠北大学（韓国）、ゲント大学（ベルギー）、ダルエスサラーム大学（タンザニア）の4つの交流デーに参加しました。記録によると、これまでに中国で20回、韓国で11回、欧州で4回、アフリカで6回、計41件の北大交流デーが開催され、本学以外からの参加者数は6,711人になります。

今年度、私はソウル、ヘルシンキ、ルサカの3オフィスを訪問しました。各オフィスにはそれぞれの表情があります。ルサカオフィスは、平成26年度から文部科学省の「留学コーディネーター配置事業」を委託されており、サハラ以南アフリカにおける、日本の多くの大学へのウィンドウ

の役割を果たしています。また、北大に留学していた同窓生のザンビア大学教授が多くおられるなど、両大学の良好な関係は、息の長い交流の過程で醸成されたものであることを実感しました。

本学の掲げる今後の計画として、ASEANオフィスと北米オフィスの開設があります。その際には、ひとつの形態に固執せずに、開設地の文化・社会・経済・政治などの状況に適合した形態を選ぶ必要があるでしょう。

### グローバル教育推進センター（旧 留学生センター）について

留学生センターが平成28年3月1日にグローバル教育推進センターとして改組され、私がセンター長を務めています。改組に伴う最も大きな変化は、従来の受入留学生の教育を行う部門に加え、留学を希望する学生に対する教育支援を行う部門が新設されたことです。今後、この部門が中心となって、派遣留学生のための事前事後教育、留学に伴うリスク管理などの更なる充実を図っていきます。

### 国際化について

副学長として海外オフィスとグローバル教育推進センターを担当していますが、1年間の私の国際本部関連の用務の中で、時間と体力を一番要求されたのは、10回の海外出張でした。山口佳三総長や上田一郎理事・副学長の代理として式典等に出席する際には、相手大学のトップや訪問国に駐在する日本大使等の要人との接見もあり、とても緊張します。しかし、同時に、新しい土地で初対面の方々に会うことは刺激的であり、新たに学ぶことばかりで、私にとって非常に貴重な体験となりました。国際化という言葉は色々に解釈されますが、究極的には、国境と文化を越えた人と人の繋がりだと思っておりますので、今後も、与えられた用務を通して、少しでも北海道大学の更なる国際化に貢献していく所存です。

## ■全学ニュース

### 本学職員表彰を実施



被表彰者と総長ほか列席者

2月26日（金）、総長室において「北海道大学職員表彰」表彰式が行われ、関係者列席のもと、総長から被表彰者に、賞状及びメダルが授与されました。

この表彰は、職務上顕著な功績等があった方及び職務外において職員の模範として表彰に値する善行を行った方を対象とするものです。

このたび表彰された方は、電子科学研究所技術職員 武井将志氏で、功績は、以下のとおりです。

- ①従来の3倍の巨大トンネル磁気キャパシタンス効果の測定を行う特殊な電磁石を設計・作製した。
- ②同位体顕微鏡の夜間無人分析の自動化に大きく貢献する、液体窒素供給デュワーの性能不足解消に取り組

み、成果をあげた。

- ③民間企業との共同研究において、大面積ベルト方式のナノインプリント装置の設計・作製を担当し、成果をあげた。

（総務企画部人事課厚生労務室）

### 「総長主催記者懇談会」を開催

2月17日（水）、事務局第一会議室Bにおいて、4回目となる「総長主催記者懇談会」を開催しました。報道機関とのより良いコミュニケーションを図るために実施しており、各社から記者8名の出席がありました。本学からは、山口佳三総長、三上 隆理事・副学長、安田和則理事・副学長、徳久治彦理事・事務局長が出席しました。

冒頭、山口総長から本学の特色ある取り組みとして、「異分野連携による国際大学院」の新設、大学院特別教育プログラム「新渡戸スクール」の開校、「Hokkaidoサマー・インスティテュート」の実施についての話題提供があり、その後、記者の方々との懇談に移りました。

記者からは、平成29年4月開設予定の3つの国際大学院に関する質問が数多く寄せられ、また、大学を取り巻く状況等についての質問もあり、闊達な雰囲気ですべての質問が済みました。

会の最後には、山口総長から「今後もこのような懇談会を開催し、本学が何を目標としているかを伝えていきたい」

との発言がありました。

なお、当日席上には、今後の取材活動に利用していただくため、最新の取り組みに関する資料や広報誌を配付し、情報発信に努めました。

（総務企画部広報課）



総長記者懇談会の様子



記者からの質問に答える山口総長

## NHK Eテレ「新世代が解く！ニッポンのジレンマ」の番組収録に協力



盛況だった公開収録の様子

3月5日（土）、人文・社会科学総合教育研究棟W103において、NHK Eテレの討論番組「新世代が解く！ニッポンのジレンマ」の公開収録が行われました。

当日は、北大生をはじめとする141名もの観客が参加するなか、番組司会であり社会学者の古市憲寿さん、NHKの青井 実アナウンサーが若手論客を迎え、和やかな雰囲気が進みま

した。若手論客3名のうちのひとり、メディア・コミュニケーション研究院の岡本亮輔准教授です。

「ツーリズムのジレンマ」をテーマとした今回は、3月26日（土）に北海道新幹線が開業する北海道から、グローバル化におけるニッポンツーリズムの新戦略のあり方を考えました。

第1部「観光立国」、第2部「異文化交流」、第3部「LCC（格安航空会

社）、情報化」の3部構成で観客を交えての討論が行われ、岡本准教授からは「観光の表舞台と舞台裏」についての話があり、「リピーターの観光客は、その国や地域の裏側も見たい。それは日常生活にも入り込んでいくことであり、観光客と住民との軋轢が生じやすくなる」と述べました。

この模様は、3月27日（日）（3月26日（土）深夜）に全国放送されました。

今回の収録は経済学事務部の協力を得て実施され、成功裡に終了しました。今後も様々な機会を活用し、本学の魅力をアピールする取組みを行っていきたいと思います。

（総務企画部広報課）

## 第7回さっぽろ環境賞生物多様性保全部門地域賞を受賞

本学は、この度「第7回さっぽろ環境賞 生物多様性保全部門」で地域賞を受賞し、2月17日（水）に秋元克広札幌市長から施設・環境計画室生態環境タスクフォース長の近藤哲也総長補佐に道産木材で作られた表彰状、佐々木力施設部長にクリスタルの盾が贈呈されました。

「さっぽろ環境賞」は、札幌の豊かな環境保全に貢献する個人、企業及び団体を顕彰することにより、市民、事業者等の環境保全に関する意識の向上及び環境配慮活動のさらなる普及促進を図り、ひいては世界に誇れる環境都市「環境首都・札幌」の推進に資することを目的としています。

札幌キャンパスは、札幌市の中心部にありながら広大な緑地を有し、周辺市民の散策と交流の場や、観光資源としても地域に貢献しています。また、市街地のヒートアイランド対策としての役割も担っています。札幌キャンパスの敷地面積177haのうち、緑地の面積は農場を除いても52haあり、中には希少種を含む在来の動植物が生息する

緑地も残されています。

本学は、都市における緑地の多面的な価値を重要視し、総長室を構成する施設・環境計画室に「生態環境タスクフォース」を設置して、安全で快適な緑地の提供と生物多様性保全のための総合的な活動を行っています。活動内容は緑地と緑量の維持、危険木・障害木への対応、芝生・野生草花の維持・管理、有害生物への対応、そして生物多様性の保全などに分類されます。生物多様性の保全に関する活動の中でも、特に注目に値するのが「生きもの調査」です。生物の位置情報や個体数

を含む詳細な情報をデータベース化して、建物建設時のアセスメントと希少種の保全などに活用しており、他の大学には見られない先駆的な取組みとなっています。

最後に、本タスクフォース・施設部・サステイナブルキャンパス推進本部の活動について、本学構成員各位の日頃のお力添えに感謝しますとともに、今後一層のご理解とご協力をお願いいたします。

（施設部環境配慮促進課、サステイナブルキャンパス推進本部）



表彰式にて記念撮影（左から近藤総長補佐、佐々木施設部長）

# 北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表

平成28年度一般入試の前期日程試験は2月25日（木）・26日（金）に、後期日程試験は3月12日（土）に実施しました。また、私費外国人留学生入試第2次選考は2月18日（木）に実施しました。各試験の実施状況等は、次のとおりです。

## 1. 前期日程

志願者は5,738名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が4名いました。失格者を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、志願者全員が合格し、受験対象者は5,734名で、受験者は5,592名でした。

合格者は2,079名で、合格発表は、3月7日（月）午前9時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が841名で全体の40.5%。卒業年度別では、平成28年3月高等学校卒業者が1,276名で全体の61.4%。また、男女別では女子が634名で全体の30.5%でした。

## 2. 後期日程

志願者は4,181名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が2名いました。失格者を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、志願者全員が合格し、受験対象者は4,179名で、受験者は1,883名でした。

合格者は550名で、合格発表は、3月22日（火）午後4時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が106名で全体の19.3%。卒業年度別では、平成28年3月高等学校卒業者が329名で全体の59.8%。また、男女別では女子が132名で全体の24.0%でした。

## 3. 私費外国人留学生入試

私費外国人留学生入試の志願者は122名で、第1次選考の合格者は45名、第2次選考の受験者は39名、合格者は22名でした。

（学務部入試課）

## 平成28年度一般入試（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者		
総合入試	文系	100	372 ( 114)	8 ( 2)	364 ( 112)	3.6	109 ( 37)		
	理系	数学重点選抜群	130	312 ( 45)	6 ( 1)	306 ( 44)	2.4	139 ( 15)	
		物理重点選抜群	235	662 ( 87)	15 ( 3)	647 ( 84)	2.8	251 ( 25)	
		化学重点選抜群	235	685 ( 175)	19 ( 7)	666 ( 168)	2.8	251 ( 57)	
		生物重点選抜群	177	464 ( 173)	13 ( 6)	451 ( 167)	2.5	189 ( 66)	
		総合科学選抜群	250	819 ( 301)	25 ( 9)	794 ( 292)	3.2	268 ( 95)	
学部別入試	文学部	118	324 ( 158)	7 ( 4)	317 ( 154)	2.7	128 ( 63)		
	教育学部	20	54 ( 27)	0 ( 0)	54 ( 27)	2.7	20 ( 10)		
	法学部	140	322 ( 108)	4 ( 1)	318 ( 107)	2.3	145 ( 48)		
	経済学部	140	332 ( 99)	3 ( 0)	329 ( 99)	2.4	150 ( 52)		
	医学部	保健学科	医学科	97	376 ( 101)	17 ( 3)	359 ( 98)	3.7	102 ( 25)
			看護学専攻	60	150 ( 141)	8 ( 8)	142 ( 133)	2.4	67 ( 63)
			放射線技術科学専攻	28	87 ( 25)	0 ( 0)	87 ( 25)	3.1	30 ( 12)
			検査技術科学専攻	28	86 ( 54)	4 ( 4)	82 ( 50)	2.9	29 ( 15)
			理学療法学専攻	13	40 ( 8)	2 ( 0)	38 ( 8)	2.9	14 ( 5)
			作業療法学専攻	13	61 ( 37)	4 ( 3)	57 ( 34)	4.4	15 ( 7)
			歯学部	30	118 ( 47)	5 ( 3)	113 ( 44)	3.8	30 ( 10)
	獣医学部	20	95 ( 41)	2 ( 1)	93 ( 40)	4.7	22 ( 6)		
	水産学部	105	375 ( 90)	4 ( 0)	371 ( 90)	3.5	120 ( 23)		
計	1,939	5,734 (1,831)	146 (55)	5,588 (1,776)	2.9	2,079 (634)			

※ ( ) 内の数字は、女子で内数。

## 平成28年度一般入試（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者		
学部別入試	文学部	37	315 ( 113)	168 ( 57)	147 ( 56)	4.0	41 ( 15)		
	教育学部	10	85 ( 32)	42 ( 19)	43 ( 13)	4.3	11 ( 6)		
	法学部	40	369 ( 87)	203 ( 47)	166 ( 40)	4.2	52 ( 12)		
	経済学部	20	192 ( 38)	118 ( 22)	74 ( 16)	3.7	20 ( 3)		
	理学部		数学科	13	93 ( 5)	52 ( 0)	41 ( 5)	3.2	15 ( 0)
			物理学科	5	91 ( 13)	40 ( 5)	51 ( 8)	10.2	9 ( 0)
			化学科	23	140 ( 22)	74 ( 12)	66 ( 10)	2.9	26 ( 1)
			生物科学科 生物学専修分野	10	93 ( 30)	39 ( 10)	54 ( 20)	5.4	12 ( 4)
			生物科学科 高分子機能学専修分野	5	71 ( 22)	28 ( 6)	43 ( 16)	8.6	6 ( 1)
			地球惑星科学科	5	95 ( 24)	46 ( 14)	49 ( 10)	9.8	6 ( 0)
	医学部	保健学科	放射線技術科学専攻	7	54 ( 18)	31 ( 11)	23 ( 7)	3.3	7 ( 2)
			検査技術科学専攻	7	113 ( 75)	59 ( 38)	54 ( 37)	7.7	9 ( 8)
			理学療法学専攻	4	31 ( 9)	17 ( 4)	14 ( 5)	3.5	4 ( 2)
	歯学部	8	113 ( 40)	58 ( 18)	55 ( 22)	6.9	8 ( 4)		
	薬学部	24	230 ( 87)	126 ( 45)	104 ( 42)	4.3	26 ( 11)		
	工学部		応用理工系学科	34	270 ( 38)	173 ( 24)	97 ( 14)	2.9	40 ( 4)
			情報エレクトロニクス学科	38	322 ( 16)	197 ( 5)	125 ( 11)	3.3	38 ( 4)
			機械知能工学科	30	272 ( 10)	156 ( 2)	116 ( 8)	3.9	31 ( 2)
			環境社会工学科	49	314 ( 49)	173 ( 24)	141 ( 25)	2.9	56 ( 9)
	農学部	53	419 ( 119)	244 ( 66)	175 ( 53)	3.3	58 ( 17)		
獣医学部	15	114 ( 52)	46 ( 17)	68 ( 35)	4.5	15 ( 9)			
水産学部	50	383 ( 101)	206 ( 48)	177 ( 53)	3.5	60 ( 18)			
計	487	4,179 (1,000)	2,296 (494)	1,883 (506)	3.9	550 (132)			

※ ( ) 内の数字は、女子で内数。

平成28年度私費外国人留学生入試合格者数等一覧

学部・学科等

学部・学科・専攻・コース等		志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
文学部	人文科学科	18	(13)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
教育学部	教育学科	4	(4)	4	(4)	4	(4)	1	(1)
法学部	法学課程	7	(3)	4	(1)	4	(1)	1	(0)
経済学部	経済学科	12	(4)	2	(1)	1	(1)	1	(1)
	経営学科	4	(1)	1	(1)	0	(0)	0	(0)
理学部	数学科	2	(0)	2	(0)	2	(0)	0	(0)
	物理学科	5	(1)	2	(1)	2	(1)	0	(0)
	化学科	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	生物科学科	6	(3)	2	(1)	2	(1)	1	(0)
	(生物学専攻分野)	5	(3)	2	(1)	2	(1)	1	(0)
	(高分子機能学専攻分野)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	地球惑星科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
医学部	医学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	保健学科	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	看護学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	放射線技術科学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	検査技術科学専攻	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	理学療法学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
歯学部	歯学科	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
薬学部	薬科学科	4	(2)	4	(2)	4	(2)	3	(1)
	薬学科	2	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
工学部	応用理工系学科	4	(3)	3	(3)	1	(1)	1	(1)
	応用物理学コース	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	応用化学コース	3	(3)	3	(3)	1	(1)	1	(1)
	応用マテリアル工学コース	-	-	-	-	-	-	-	-
	情報エレクトロニクス学科	16	(2)	5	(0)	4	(0)	4	(0)
	情報理工学コース	11	(2)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	電気電子工学コース	2	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)
	生体情報コース	2	(0)	2	(0)	2	(0)	2	(0)
	メディアネットワークコース	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	電気制御システムコース	-	-	-	-	-	-	-	-
	機械知能工学科	10	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	機械情報コース	5	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	機械システムコース	5	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	環境社会工学科	9	(5)	3	(0)	2	(0)	1	(0)
	社会基盤学コース	-	-	-	-	-	-	-	-
	国土政策学コース	-	-	-	-	-	-	-	-
	建築都市コース	5	(3)	1	(0)	0	(0)	0	(0)
	環境工学コース	4	(2)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
資源循環システムコース	-	-	-	-	-	-	-	-	
農学部	生物資源科学科	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	応用生命科学科	6	(2)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	生物機能化学科	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	森林科学科	3	(2)	2	(1)	2	(1)	2	(1)
	畜産科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	生物環境工学科	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	農業経済学科	-	-	-	-	-	-	-	-
獣医学部	共同獣医学課程	2	(2)	2	(2)	2	(2)	0	(0)
水産学部	海洋生物科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	海洋資源科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	増殖生命科学科	2	(2)	2	(2)	2	(2)	1	(1)
	資源機能化学科	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計		122	(53)	45	(21)	39	(18)	22	(8)

※ ( ) 内の数字は、女子で内数。

国・地域別

国・地域	志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者		
インドネシア	2	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)	
シンガポール	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	
韓国	18	(6)	2	(0)	2	(0)	2	(0)	
台湾	2	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)	
中国(香港を含む)	99	(44)	41	(19)	35	(16)	18	(6)	
合 計		122	(53)	45	(21)	39	(18)	22	(8)

※ ( ) 内の数字は、女子で内数。



# 北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を發揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	18,153件 3,079,662,745円
基金累計額 (2月29日現在)	教職員の寄附率 36.0% (1,428件/3,962人)

## 2月のご寄附状況

法人等8社、個人260名の方々から10,448,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

### 寄附者ご芳名 (法人等)

鹿島建設株式会社 北海道支店、株式会社構研エンジニアリング、株式会社シーウェイエンジニアリング、株式会社ドーコン、北海道大学連合同窓会、株式会社萬世閣、宮脇グループホールディングス株式会社、文部科学省北大卒業生等と北大役職員との意見交換会参加者一同

### 寄附者ご芳名 (個人)

合川 正幸	青木 東雄	朝倉 清高	浅野 賢二	蛇川 雄司	栗田 雅彦	五十嵐 功	井口 光雄
池田 隆	石田 高啓	石塚 宗司	石野 悟司	伊丹 健一	伊藤 哲郎	井上 嘉人	猪股 竜彦
今井 恵史	入澤 秀次	上原 泰正	遠藤 仁彦	大久保 智	大島 信豊	太田 道男	大塚 正幸
大貫 富夫	大沼 博志	大場 誠道	岡 睦夫	小笠原真理	奥 弘治	奥 正晴	納 弘
小田代 弘	小内 透	小原 大和	貝沼 征嗣	海保 康男	婦山 雅秀	角田與史雄	柏崎 佳人
角 浩美	加藤 讓嗣	加藤 久男	金川 眞行	上岡 一隆	栢原 英郎	川上 洵	川手 美富
川端 和重	川村 彰	河本 充司	神原 一雄	蒲原 貢	鞠谷 佳郎	岸 力	北井 良吉
北郷 繁	北郷 新平	工藤 浩史	桑原 洋	桑原 弘昌	小池 清峰	後藤 勉	小間 憲彦
小峰 良介	近藤 悟	近藤 俣郎	近藤 亮	今野 貢	斉藤 久	齋藤 義信	佐伯 浩
酒井 裕二	桜井 謙介	櫻井 芳雄	佐々木哲郎	佐藤 謙二	佐藤 幸男	佐藤 正朝	佐野 将義
佐野 侑房	澤井 廣之	三升畑元基	宍戸 迪武	嶋岡 智子	島田 知明	清水 敏夫	清水 智之
下出 育生	下山 哲志	白石 哲也	菅村 敏彦	杉野 文明	杉山 洋平	鈴木 純一	鈴木はる江
須田 孝徳	数土 勉	清崎 晶雄	関口 光雄	関野 高志	瀬口 智勝	瀬名波栄潤	多尾田 望
高井 修	高木雄一郎	高坂 清和	高澤 秀昭	高澤 寛	高橋 清	田口 博一	武山 泰典
舘谷 清	田中 譽典	田中 洋行	田中 充	谷藤 和三	田丸 英彰	辻 信三	土家 琢磨
土山 和夫	坪田 靖	寺澤 睦	寺山 朗	堂垣内光弘	土岐 祥介	豊田 威信	永野 太一
永埜 宗孝	中山 隆	奈良 人司	西尾 正己	西村 薫	西本 聡	丹羽 啓達	根田 敬治
野田 節男	野焼 計史	長谷川和義	畑 秀叔	浜口 義之	濱田 賢一	林 延泰	林 憲正
深谷 治郎	福岡 捷二	福田 晃三	福田 佳之	福本 淳	藤井 利侑	藤井 久一	藤波 岳臣
古川 康孝	古澤 秀利	北條 紘次	細川 秀人	本田 進	本間 修司	前川 静男	増永 防夫
松浦 健二	松橋 数保	松本 敏幸	水谷 洋一	三田村好矩	三橋 國利	宮入 貞徳	宮川 房夫

宮木 康二	宮本 裕	宮脇 敬	武藤 裕之	村井 禎美	村上 幸夫	毛利 徳成	本宮 勝彦
森岡 宏之	安武 良平	柳沢 満夫	山内 隆嗣	山上 徹郎	山口 建章	山口 良文	山田 浩次
山本 泰司	余湖平八郎	横山 陽	吉岡 國彦	吉澤 良	吉田 幸一	吉田 幸平	吉田 広志
吉田 文夫	吉本 秀一	若尾 将徳	渡邊 茂樹	渡邊 英雄	割田三喜男		

**銘板の掲示** (20万円以上のご寄附)

(法人等)

鹿島建設株式会社 北海道支店, 株式会社萬世閣, 宮脇グループホールディングス株式会社

(個人)

田中 洋行, 福岡 捷二, 三田村好矩

**感謝状の贈呈**

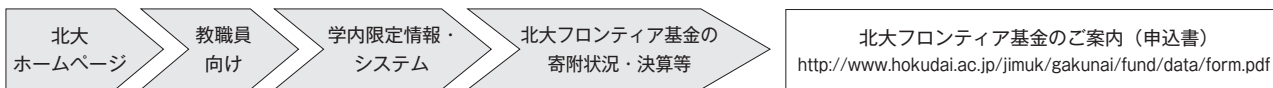


佐々木俊夫 様 (平成28年3月2日)

**ご寄附のお申し込み方法**

① 給与からの引き落とし

申込書は, 本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし, ご記入の上基金事務室に提出してください。



② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて, 事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は, 本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか, 各部署事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので, ご利用ください。

④ クレジットカードでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ (<http://www.hokudai.ac.jp/fund/form.html>) のクレジットカード寄附申込フォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室 (事務局・学内電話 2017)

(総務企画部広報課)

## 平成27年北大ペンハロー賞授与式を挙行



授与式での記念写真

2月23日（火）、情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室において、平成27年北大ペンハロー賞の授与式を行い、新田孝彦理事・副学長から賞状の授与と記念品が贈呈されました。

北大ペンハロー賞は、平成17年度か

ら開始され、本学学生の課外活動の充実と更なる活性化を図るため、都道府県規模の競技会・コンクールで優勝するなど、高い評価を受けた学生団体等を表彰する制度です。

今回は、8団体、30個人が受賞しま

した。今回までで、129団体、347個人  
の計476件に授与されています。

（学務部学生支援課）

## 留学生センター日本語研修コース修了式（2015年10月入学者）



集合写真

留学生センター日本語研修コース研修生の修了式を2月16日（火）午後2時より国際本部で行いました。

この研修コースは、主に大使館推薦の国費外国人留学生のうち、修了後に本学大学院又は道内の他大学大学院に進む研究留学生や、本学工学部に入学する日韓共同理工系学部留学生、及び現代日本学プログラム留学生に日本語予備教育を行うためのもので、留学生センターにおいて6ヶ月間開設されています。

今回修了式を迎えたのは、国費外国人留学生2名と日韓共同理工系学部留学生7名、現代日本学プログラム留学生19名に加え、学内公募により本コースを集中日本語コースとして受講した5名の計33名です。

修了式では、来賓や教員の方々が見守る中、日本語研修コース研修生には修了証書及び証明書が、集中日本語コース受講者には履修証明書が、上田一郎国際本部長より一人ひとりに授与されました。引き続き上田国際本部長



修了証書を受け取る学生

から、祝辞と今後の飛躍を祈念する激励の言葉が述べられ、修了者は真剣な面持ちで聞き入っていました。

最後に記念写真を撮影し、修了式は終了しましたが、その後もしばらく、お世話になった日本語教員や留学生同士で写真撮影や懇談が続いていました。

（国際本部国際教務課）

## 平成27年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催

2月16日（火）ホテル札幌ガーデンパレスにおいて、平成27年4月以降に新たに入学した留学生の歓迎、並びに本年3月に勉学や研究を終えて卒業する予定の留学生の祝賀を兼ねた総長主催の懇談会を開催しました。当日は留学生をはじめ、在札幌外国公館、留学生支援団体の方々のほか、各部局長、指導教員の先生など、約390名の出席がありました。

懇談会は、山口佳三総長の挨拶に始まり、続いて在札幌米国総領事館首席領事のジョエレン・ゴーク氏から来賓を代表してご挨拶いただきました。

続いて、上田一郎理事・副学長の乾杯で開会し、平成27年度に入学した留学生を代表して、日本語・日本文化研修コース研修生のパク・ミンソクさん（韓国）から北海道で出会った人達の温かさ、熱心に指導してくれた先生への感謝の気持ち、そして将来の希望と意気込みが語られました。次に、卒業する留学生を代表して、文学研究科修士課程のカマロフ・アブドゥルアジズさん（ウズベキスタン）から渡日直後の頃のエピソードや、新入生に対しての激励の言葉と卒業生への祝福の言葉が述べられ、最後は学校生活を送る上

でお世話になった全ての方々への感謝の言葉で締めくくられました。

スピーチの後、引き続き留学生と指導教員をはじめ、大学関係者や留学生支援団体の方々との懇談の輪が広がり、楽しい交流のひとつとなりました。バングラデシュの留学生そしてインドの留学生による素晴らしいダンスの余興もあり、懇談会は盛況のうちに終了しました。

（国際本部国際教務課）



山口総長



在札幌米国総領事館首席領事 ゴーク氏



新入生代表 パクさん



卒業生代表 アブドゥルアジズさん



バングラデシュの留学生によるダンス



インドの留学生によるダンス

## タンザニア連合共和国ダルエスサラーム大学で「日本留学フェア」を開催

2月12日（金）にタンザニア連合共和国のダルエスサラーム大学において、「日本留学フェア」を開催しました。本留学フェアは、本学ルサカオフィスを拠点に実施している、文部科学省の委託事業「留学コーディネーター配置事業」の活動の一つとして行いました。これは、本学のみならず、日本全国の大学へアフリカ・サブサハラ地域から優秀な学生の留学を促進することを目的とした事業です。日本から筑波大学教員1名、京都大学教員1名、熊本大学教職員4名、独立行政法人日本学生支援機構職員1名及び本学の教職員11名の合計18名が参加し、午前に合同ワークショップを、午後に留学説明会を実施しました。

合同ワークショップには、ダルエスサラーム大学の教職員8名と在タンザニア日本国大使館職員1名及び日本から参加した教職員等で、農学、医学、理学、国際連携の4つのグループに分かれ、研究紹介や今後の大学間交流に向けた話し合いが行われました。

続いて留学説明会では、ダルエスサラーム大学開発学研究所のエスター・

ドゥングマロ所長による挨拶の後、同大学クスバート・キマンボ副学長補佐と吉田雅治在タンザニア日本国特命全権大使から歓迎の言葉があり、本学の寺尾宏明副学長が挨拶を行いました。その後、独立行政法人日本学生支援機構の太田隆文留学情報課長より、日本の留学生支援に関する説明と、在タンザニア日本国大使館の下條 匠書記官より国費外国人留学生制度に関する説明があった後、独立行政法人国際協力機構タンザニア事務所の梅津 径氏よりアフリカの若者のための産業人材育成イニシアチブプログラムについて説明がありました。また、日本留学経験のあるドゥングマロ所長とタンザニア通信規制庁のエマニュエル・マナセ主任研究員からは、日本に留学した際の体験談について発表がありました。最後に、留学説明会に参加した各大学より大学紹介が行われ、参加者は熱心に聞き入っていました。

本留学説明会には、ダルエスサラームの高校生、大学生と教職員など350名以上が参加し、説明会を行っている間、訪れる学生が途切れないほど盛況

となり、留学に関する関心の高さがうかがえました。また、留学説明会と並行し、本留学フェアに日本から参加した大学等の機関及び独立行政法人国際協力機構がブースを出展し、日本留学に関心を持っている学生の相談に対応した他、資料参加した9大学\*のパフレットも配布しました。

これらの行事により、研究交流を促進し、また、日本留学に関するより多くの情報を現地の学生、教職員に直接提供することで、アフリカからの留学生数の増加が期待されます。

ルサカオフィスでは今後も、サブサハラ地域からの日本留学促進のため、留学説明会の実施、教育・研究機関等との連携拡大、教員や学生の相互交流の促進を行っていく方針です。

\*資料参加大学：三重大学、東京外国語大学、東京国際大学、早稲田大学、横浜国立大学、同志社大学、大阪大学、鹿児島大学、琉球大学

（国際本部国際連携課）



会場の様子



留学説明会で挨拶する寺尾副学長



留学相談ブースを訪れる学生等

## 北海道大学ザンビア同窓会を設立，ルサカで同窓生懇談会を開催



ザンビア同窓生懇談会の集合写真（前列中央は小井沼在ザンビア日本国大使）



開会の挨拶をする寺尾副学長

北海道大学ザンビア同窓生懇談会を、2月15日（月）にザンビア大学獣医学部Board Roomで開催しました。

懇談会の開催に先立ち、ザンビア人同窓生によるミーティングが開かれ、「北海道大学ザンビア同窓会」を設立することが承認され、会長にZulu Victor Chisha氏（ザンビア大学、日本語研修生）、執行部役員5人が就任することが決まりました。

本学はこれまで、獣医学を中心に工学、農学、情報科学などの分野でザンビアから30人を超える留学生を受け入れ、高度な人材育成に取り組んできました。本学の卒業生はザンビアをはじめ、南部アフリカにおいて大いに活躍

しています。また、平成24年4月には北京、ソウルに次ぐ、本学3カ所目の海外オフィスとなるルサカオフィスをザンビア大学獣医学部内に開設しました。今後、北海道大学ザンビア同窓会はルサカオフィスと協力しつつ、本学の知名度向上とザンビアの発展に貢献することが期待されます。

ミーティングの後に開催した同窓生懇談会は、第1部「北海道大学ザンビア同窓会設立記念式典」、第2部食事会で構成されました。参加者は、寺尾宏明副学長、ザンビア人同窓生12人、本学教職員13人に、在ザンビア日本国大使、ザンビア大学獣医学部からのゲストを迎え、計33人に上りました。

記念式典では、寺尾副学長による開会挨拶の後、小井沼紀芳在ザンビア日本国大使とザンビア大学獣医学部のKennedy Choongo学部長からそれぞれご祝辞をいただきました。続いて寺尾副学長による本学の近況報告、同窓生代表Mweene Aaron Simanyengwe氏（ザンビア大学、獣医学研究科）のザンビアにおける本学同窓生についてのスピーチなどが続きました。

食事会では、ザンビア人同窓生、本学教職員、ゲストが和やかに交流し、盛況の内に幕を閉じました。

（国際本部国際連携課）

## 北海道地区国立大学教養教育連携実施事業FDフォーラム「発展する遠隔授業」を開催

2月12日（金）に北海道地区国立大学教養教育連携実施事業FDフォーラム「発展する遠隔授業」を高等教育推進機構N1講義室において開催しました。

北海道地区国立大学教養教育連携実施事業は、北海道地区国立大学の教養教育の充実強化を目的として、平成26年2月に締結された単位互換協定に基づき、北海道地区国立大学が教養教育

を連携して実施する事業です。この事業により、学生は各大学から提供される双方向の遠隔授業や対面による授業を履修し、所属する大学の単位として修得することができます。

平成26年度は試行として24科目が開講され、平成27年度からは、本格実施として授業科目数を拡大して実施しており、今年度は各大学から105科目が提供され、平成28年度は各大学から提

供された123科目が開講される予定となっています。

本フォーラムは、本事業の成果報告の一環として、高等教育推進機構高等教育研修センターと共同して企画したものであり、午前の部、午後の部の2部構成で実施しました。

午前の部は、新田孝彦北海道地区国立大学連携教育機構長から挨拶があった後、吉田光成文部科学省高等教育局

国立大学法人支援課企画官による「国立大学改革における大学間連携の状況について」と題した講演、小林幸徳北海道地区国立大学連携教育機構副機構長による本事業の概要説明、池田文人高等教育推進機構准教授による遠隔授業に係るデモンストレーションの後、双方向遠隔授業を実施している信州大学、奈良教育大学及び岡山商科大学か

らのパネリストを交えたパネルディスカッションが行われました。

午後の部は事例報告及び意見交換会として、本事業においてこれまでに遠隔授業を担当した本学の教員など7名から遠隔授業の事例報告があり、活発な意見交換が行われました。

本フォーラムは、双方向遠隔授業システムにより、北海道地区の国立大学

に加えて、信州大学、奈良教育大学、岡山商科大学と接続して行われ、本会場約80名を含む全国から約160名の参加があり、遠隔授業に係る関心の高さがうかがえました。

(学務部学務企画課)



会場の様子



講演する吉田文部科学省高等教育局  
国立大学法人支援課企画官



遠隔授業に係る事例報告  
(白川龍生北見工業大学准教授)

## シンポジウム「FDの実質化に向けた協力体制の構築」を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、2月12日(金)にシンポジウム「FDの実質化に向けた協力体制の構築」を高等教育推進機構大講堂において開催しました。本シンポジウムは、FDの実質化に向けた協力体制の構築等に貢献することを目的に、高等教育研修センターが主催し実施したもので、学内の他、37大学等から多数の参加がありました。

開催にあたり、新田孝彦センター長から挨拶があった後、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室の辻

邦章専門官による「ネットワーク型のFD活動の今後に期待すること」と題した講演が行われました。その後、愛媛大学の中井俊樹教授、東北大学の羽田貴史教授、本学の細川敏幸教授から各大学の取り組みが報告されました。

引き続き、帝京大学の井上史子教授による指定討論が行われた後、参加者とのディスカッションが行われ、活発な質疑応答が行われました。

シンポジウム終了後に、同日に開催した「北海道地区国立大学教養教育連携実施事業FDフォーラム」と合同で

行った情報交換会には、講師の方々にもご参加いただき、当日の内容及び各大学等のFDの現状について意見が交わされる等、大いに盛り上がりました。

事後アンケートでは、「全体的な話から個別具体例まで把握できて、大変勉強になりました」「センターの役割について議論があり、とても参考になりました」等の意見があり、参加者にとって有意義なシンポジウムになったようです。

(高等教育推進機構)



会場の様子



ディスカッションの様子

## 平成27年度第2回「北海道大学TF研修会」を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、2月18日（木）に高等教育推進機構N1講義室等を会場として、TF（ティーチング・フェロー）研修会を開催しました。これは、平成27年度からTF制度が本学において導入されたことに伴い、採用候補者である大学院生を対象として平成27年2月から実施しているものです。

TF制度は、大学院博士課程の学生を対象に、大学院教育の一環として、教員と分担しながら学士課程の授業を担う機会を与えることで、教育能力を高め将来指導的役割を果たす人材を養成するとともに、学士課程教育をより一層充実させることを目的としています。また、TFに採用される学生には、本研修会などのTF研修の修了を義務づけ、事前に理解を深めてもらうこととしています。

午前の部では、新田孝彦センター長の挨拶に続き、「TFとしての心構えと教育倫理綱領の理解」「シラバスの構成と意味」「評価の機能と種類」「クラス・マネジメント」といった、TFに関する具体的な内容の講演が行われました。午後の部では、参加者は5～6名ずつのグループに分かれ、アイスブレイクを行った後、各教室で設定されたテーマの下、グループ討議を行いました。最後にグループごとにそ

の成果を発表し、全体で討論しました。

今回の研修会では、修士課程2年次及び博士課程の学生69名が修了しました。どの参加者も積極的に研修に取り組んでおり、TFに高い意欲を持って臨んでいる様子が感じられました。

平成28年度第1回北海道大学TF研修会は、8～9月に開催の予定です。

（高等教育推進機構）



午前の講演の様子



午後の実習の様子

## マネジメント能力開発ワークショップ「プロジェクト・マネジメント入門」を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、教職員に対するFDの一環として、2月23日（火）に北図書館西棟2階においてマネジメント能力開発ワークショップ「プロジェクト・マネジメント入門」を実施しました。

本ワークショップは、かつて企業で人事研修等を行っていた愛媛大学教育・学生支援機構の丸山智子特任助教を講師にお招きし、プロジェクトにお

ける作業の系統化、メンバーへの作業割振り、リスク管理や進捗管理といったプロジェクト・マネジメントの基礎を学ぶことを目的として実施したもので、本学教職員18名、他大学等の教職員7名が参加しました。

開催にあたり、新田孝彦センター長から挨拶があった後、細川敏幸副センター長による教育倫理綱領に関する講演が行われました。

その後、丸山特任助教によるプロジェクト・マネジメントに関するワークショップが行われました。参加者は、丸山特任助教の講演と与えられたプロジェクトテーマに基づき、グループでそれをマネジメントする手法について体験しながら、研修を進めていくことができました。

事後アンケートでは、「プロジェクト計画の構築方法について具体的な話



研修を行う丸山特任助教



研修の様子



が聞けて良かった」「マネジメントを一つの метод論としてプレゼンしていたことで今後の自身の業務・研究の管理に役立てていきたい」等の意見

が見られ、多くの参加者に好評でした。

高等教育研修センターでは、今後も教職員を対象とした様々な研修を開催

する予定ですので、積極的にご参加願います。

(高等教育推進機構)

## 「グローバルファシリティセンター」の設置及び「キックオフシンポジウム」を開催

学内先端機器の共用（オープンファシリティシステム）や委託分析等を担ってきた創成研究機構共用機器管理センターを改組し、本年1月1日に「グローバルファシリティセンター（GFC）」を発足しました。本センターでは本学における研究基盤の整備のほか、新たに3つの事業を加え一層の機能強化を図るための活動を開始しました。そして、2月3日（水）にフロンティア応用科学研究棟にてGFC設立に伴うキックオフシンポジウムを開催しました。

本学はこれまで先端機器の有効利用と研究費の効率的な運用を目的とし、研究機器の共有化や民間利用の促進を進め、日本をリードする先進的なオープンファシリティシステムを構築してきました。一方で、先端共用機器を介した研究教育の国際化や人材育成、中小規模の装置に対する共用体制の整備、学内の工作機器や工作系技術職員の能力を引き出せる体制の整備が不十

分であるといった点が課題として浮かび上がっていました。これまでセンターの柱であった、共用機器部門、委託分析部門における機能をさらに強化するため、「オープンファシリティ部門」「機器分析受託部門」とし、さらに新たな3部門を新設しました。「国際連携推進部門」では国際舞台で活躍し将来の持続発展性に寄与する優秀な人材の育成、「設備リユース部門」では中小機器の流動化による学内リソースの有効な再配分、「試作ソリューション部門」では工作機器・技術の共有化を推進します。またGFCのセンター長及び副センター長には総長補佐と本部URAを据え、ガバナンスと戦略性を強化した組織構成となっています。

シンポジウム当日は100人を超える参加者のもと、網塚浩センター長による趣旨説明、中川尚志文部科学省研究開発基盤課課長補佐による基調講演、ソウル大学のSung-Pyo Cho教授による招待講演、及び2名のGFCの部

門長から報告が行われました。続いて「先端機器共用事業の新展開～グローバルファシリティセンターへの期待～」と題したパネルディスカッションが行われ、中川課長補佐、網塚センター長に加え、中島大輔文部科学省学術機関課係長、本学の大谷文章教授、久下裕司教授、出村誠教授に登壇いただき、江端新吾副センター長（URAステーション主任URA）の進行のもと現状の装置共用に関する問題点とソリューションについて多角的な視点から議論が交わされました。とりわけ共用機器を介した異分野人材の交流である「シェアリング・ナレッジ」という概念が共有され、今後の本学における装置共用化システムにおいて更なる発展の可能性をうかがわせる有意義な議論が交わされました。

(大学力強化推進本部)



シンポジウム会場の様子



パネルディスカッションの様子

# 「第7回北大発ベンチャー促進懇談会1月例会」 「第8回北大発ベンチャー促進懇談会2月例会」を実施

1月28日（木），工学部フロンティア応用科学研究棟1階セミナー室にて「第7回北大発ベンチャー促進懇談会1月例会～新興ベンチャーキャピタルの戦略」を，2月23日（火）には，薬学部臨床講義室にて「第8回北大発ベンチャー促進懇談会2月例会～証券系創業ベンチャーキャピタルの狙い」を実施しました。

この懇談会の目的は，本学の教員，学生などが保有する起業計画を発掘し，支援の機会を拡大することであり，主催が本学産学・地域協働推進機

構，共催が独立行政法人中小企業基盤整備機構北海道本部，後援が経済産業省北海道経済産業局，北海道，札幌市，北大リサーチ&ビジネスパーク推進協議会，一般財団法人さっぽろ産業振興財団，公益財団法人北海道中小企業総合支援センター，株式会社北洋銀行，株式会社東京大学エッジキャピタル，北海道ベンチャーキャピタル株式会社となっており，更に第8回からは小樽商科大学ビジネス創造センターも加わっています。

各回とも第2部として，講師の皆様

には，事前もしくは当日に申し込んだ参加者からの起業及び起業経験に関する質問や相談に対応していただきました。

既に起業プランがある方はもちろん，漠然とした起業への思いを抱いている方は，ぜひお問い合わせください。

◆産学・地域協働推進機構産学推進本部  
創業デスク

E-mail：startup@mcip.hokudai.ac.jp

内線：9559

（産学・地域協働推進機構）

## 第7回～新興ベンチャーキャピタルの戦略

- ・「良質かつ豊富な資金を大学発ベンチャーにー日本最大規模のエンジェル投資家グループ」  
（Angel Bridge株式会社代表取締役 井上北斗氏）
- ・「大学発ベンチャーへの投資活動について」（Beyond Next Ventures株式会社代表取締役社長 伊藤 毅氏）
- ・「イノベーションに対する資金供給主体とその有効活用について」（インターキャピタル株式会社代表取締役 須藤研介氏）
- ・「NEDOから見たベンチャーキャピタル」  
（産業技術総合研究所客員研究員，新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）前副理事長 倉田健児氏）
- ・「中高生プログラミングキャンプを行う理由」（ライフイズテック株式会社取締役 松井晋平氏）

## 第8回～証券系創業ベンチャーキャピタルの狙い

- ・「DCI パートナーズのバイオフاندのご紹介」（DCIパートナーズ株式会社代表取締役社長 成田宏紀氏）
- ・「『ラッパのマークの正露丸』の新規事業開発」（大幸薬品株式会社戦略担当部長 太田譲治氏）
- ・「中国の現状／新薬技術のビジネス環境・知財」  
（川本バイオビジネス弁理士事務所所長／上海大邦法律事務所（DeBund）知識財産権代理公司高級顧問 川本敬二氏）



牧内勝哉副機構長挨拶（第7回）



個別面談会の様子（第7回）



川本所長のプレゼンテーション（第8回）



会場の様子（第8回）



個別面談会の様子（第8回）



名刺交換会の様子（第8回）

## 平成27年度「北海道ビジネスフォーラム～ふるさと応援～」 (名古屋地区) に参加

2月5日(金)、ホテル名古屋ガーデンパレス(名古屋市中区錦)において「北海道応援フォーラム～ふるさと応援～」が開催されました。主催は北海道及び北海道企業誘致推進会議で、後援が北海道大学他多数の機関、協力が北海道大学連合同窓会です(参加者は149名)。本フォーラムの第1回は昨年2月、第2回は昨年8月にいずれも東京で行われ、今回は名古屋での開催となりました。

本フォーラムは、道内各地域の経済活性化を図るため、道外で活躍する北海道出身の経営者層や道内大学出身者、道内立地企業等を対象に、北海道が抱える課題や未来に向かう新たな取り組みなどの現状をお伝えし、ふるさと

と北海道への理解や支援を訴えるのが目的です。

本フォーラムは2部構成となっており、第1部ではセミナーを行いました。まず、イントロダクションとして、北海道副知事の辻 泰弘氏から北海道の魅力などについての説明があり、その後「本道にゆかりの企業人からの講演」として、日野自動車株式会社特任顧問の蛇川忠暉氏が、次に「道内に事業展開する気が今日からの取組紹介」としてインターステラテクノロジー株式会社代表取締役の稲川貴大氏と富士電機株式会社産業インフラ事業本部組立・施設事業部アグリ技術部部长の濱口聖児氏がプレゼンテーションを行いました。

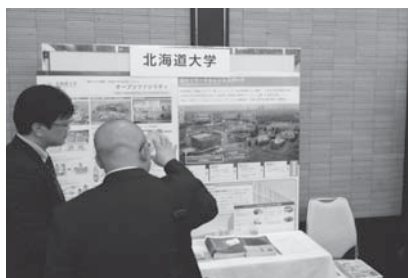
第2部は交流会で、会場内には本学の他、道内市町村などのブース展示があり、食事を楽しみながらの懇談となりました。本学のブースには、多くの本学OBや企業関係者が来訪し、活発な意見交換や情報交換で大いに盛り上がりました。第1部で講演された本学OBの蛇川氏もブースを訪れ、最近の本学の状況について聞いておられました。

今回のフォーラムで北海道への企業誘致にますます拍車がかかるものと期待しています。

(産学・地域協働推進機構)



セミナーの様子



本学ブースの様子



本学OBの蛇川氏(左)と産学・地域協働推進機構の末富 弘人材育成部門長(右)

## セミナー「本場の本物をオホーツクから～北海道大学同窓会の食品産業エルム会からのご提案～」を実施

2月19日（金）、紋別市民会館にて、セミナー「本場の本物をオホーツクから～北海道大学同窓会の食品産業エルム会からのご提案～」（主催：紋別市、本学産学・地域協働推進機構、北海道大学同窓会食品産業エルム会）を実施しました。

本セミナーは、経済産業省の平成27年度中小企業知的財産活動支援事業費補助金（地域中小企業知的財産支援力強化事業）の「産学金連携地域知的財産支援事業」を活用して実施したもので、

紋別市内の水産や農業に関係する皆様を主な対象に、本場の本物の食品をオホーツクから世界に継続的に発信するヒントについてお知らせするのが狙いです。

最初に、開会挨拶として、紋別市産業部商工労働課課長の高橋秀明氏より、本セミナーの趣旨について説明がありました。その後、食品産業エルム会からの提案として下記のプログラム①と②の発表があり、次に本学から知財活用についてのレクチャーとして③

の発表がありました。

当日は30名の受講者があり、セミナー終了後の名刺交換会では、時間ぎりぎりまで活発な懇談がありました。

オホーツクの食品関連事業が、本学並びに同窓会が関与することで、ますます発展できるようにしていきたいと考えています。

（産学・地域協働推進機構）

### プログラム

- ①「海外から継続して求められる北海道産食品とは！」  
（一般社団法人食品安全交流協会代表理事 高橋孝宜氏）
- ②「外食・中食・小売（スーパー他）の仕入の目線とその基準」  
（株式会社力の源ホールディングス購買調達本部副本部長／CBS有限責任事業組合 理事兼District Manager 奈良雅夫氏）
- ③「海外進出に向けた知的財産活用について」  
（北海道大学産学・地域協働推進機構戦略企画部門長 寺内伊久郎特任教授／弁理士）



高橋氏の講演



奈良氏の講演



寺内部門長の講演



会場の様子

## 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで 第28回「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、2月18日（木）に八芳園（東京都港区）にて本年度第3回「赤い糸会&緑の会」を開催しました。

本会は、企業と若手研究者（DC、PD）との直接情報交換会であり、企業には若手研究者の高い専門性や総合力を理解いただき、若手研究者には企業の研究開発活動や企業における博士の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で「赤い糸会&緑の会」は通算28回目の開催となり、若手研究者の参加も回を重ねるにつれ増加し、8部局から37名（DC：37名、内2名は博士課程教育リーディングプログラムより参加）、また、昨年度末より採択された科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業で、東北大学から3名、名古屋大学から2名の若手研究者が参加し、さらに本学と個別連携しているお茶の水女子大学から1名の若手研究者も参加しました。企業の各種業

界から16社（39名）、オブザーバ企業2社、オブザーバ大学2校、総勢47名にご参加いただきました。

本会では、冒頭の人材育成本部長の望月恒子教授による開会挨拶、赤い糸会担当の樋口直樹特任教授による趣旨説明の後、参加企業の皆様から業界動向や博士の活躍状況等の紹介が行われ、その後、若手研究者の自己紹介ポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行われました。

さらに「赤い糸会&緑の会」を通じて企業に就職した若手研究者の先輩が、今回は2名企業説明会に参加し、後輩達に対して熱い思いを語ってくれました。

開催後の企業側のコメントからは、「密度の高いコミュニケーションが出来て良かった」「マッチングの場として有効。今後も続けて欲しい」との声をいただくことができました。また参加した若手研究者からは、「これまで考えていなかった企業が自分の研究に興味を持っていることがわかり、就職

先の選択が増えました」「自身の研究を他の角度から見る良い機会になりました」といった嬉しい声も聞かれました。

今年度は計3回の「赤い糸会&緑の会」を実施し、本学を含め4大学、9部局、121名の研究者が参加しました。企業48社、オブザーバとして4社、4法人（大学等）総勢130名の企業等関係者の皆様にご協力いただき、今年度も盛況のうちに会を終えることができました。

終わりに、人材育成本部では若手研究者の実践力を高めることへ注力して参りますとともに、コンソーシアム結成により、東北大学や名古屋大学が運営しているより多くの洗練されたプログラムを博士たちに提供できるようになりましたので、今後ともご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページをぜひご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



望月人材育成本部長の開会挨拶



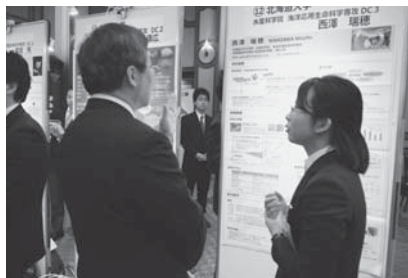
樋口人材育成本部特任教授の趣旨説明



企業からの業界動向説明



説明に聞き入る若手研究者



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換

## ■ 部局ニュース

# 教育学部がロシア・サハリン国立大学教育学部と覚書を締結

3月2日（水）、教育学部はロシア・サハリン国立大学教育学部と覚書を締結しました。

ユジノサハリンスク市にて執り行われた調印式に、本学部から小内 透教育学部長代理として水野眞佐夫国際交流委員会委員長が、また、サハリン国立大学からは教育学部長（国際交流担当副学長）のマリナ・ロマノワ教授が出席しました。

覚書の調印式に先立ち、学長のイゴー・ミナヴィン教授と国際本部長の

ヴィクター・コスノフ教授を交えて会談を行い、今後の交流プログラムの計画等について活発な意見交換を行いました。

意見交換の中では、本学部がこれまで実施してきた双方向型学部生短期留学支援制度「ESDキャンパスアジア」の発展型として平成28年度から実施を予定している「ESDキャンパスアジア・パシフィック」プログラムへのサハリン国立大学からの参加を確認しました。また、7月20日～29日に開催さ

れる同北大プログラムへのサハリン国立大学学部生の派遣とサマー・インスティテュートへの大学院生の派遣、今秋サハリン国立大学で実施されるプログラムへの本学部生・教員の派遣（ラーニング・サテライト）についても合意されました。

今回締結された覚書を基軸に、今後、学生や教員の更なる交流の持続的発展が期待されます。

（教育学院・教育学研究院・教育学部）



覚書締結後の水野国際交流委員長（左）とロマノワ教育学部長（右）



ミナヴィン学長（右から4人目）、コスノフ国際本部長（右側）らを囲んで

## 教育学部におけるESDキャンパスアジア・プログラム2015全日程を終了

教育学部では、「社会の持続可能な発展にとって教育のもつ役割は何か？」を主題とした双方向型短期留学支援事業であるESD（Education for Sustainable Development：持続可能な発展のための教育）キャンパスアジア・プログラムを韓国・高麗大学校とソウル国立大学校、中国・北京師範大学及びタイ・チュラロンコン大学と連携して、平成23年度から毎年度開催しています。

今年度のプログラムは8月19日～28日の10日間にわたる北大プログラムにより開幕し、2月10日の参加学生による報告会をもって全日程を終了しました。報告会に先立ち、昨夏、学生たち

がフィールドワークのため訪れた日高管内平取町から吉原秀喜氏（平取町役場アイヌ施策推進課アイヌ文化保全対

策室室長／学芸員）と貝澤太一氏（平取町地域活性化協議会 調査員）が小内 透学部長を表敬訪問しました。



報告会終了後の集合写真

北大プログラムでは、韓国・高麗大学のクウォン・デボン教授（教育学）をお招きした基調講演、フィールドワーク（平取町におけるアイヌ民族文化の体験交流）、総合討論などを行いました。今年度からはフィールドワークにおいて海外から来た学生に英語でアイヌ民族文化について説明できるよう3日間の事前学習を開催し、アイヌ民族文化に対する更なる理解を深めました。北大プログラム終了後は北大生が4グループに分かれ、アジア連携4大学へ短期留学し、各々の大学の特色あるプログラムに参加しました。

本事業は海外の有力協定校と連携し、個別大学の枠組みを超えて連携大学における教員・学生の相互交流と教

育的資産の共有化を実現するキャンパス環境の設営を目的としています。平成28年度は、新たにアメリカ・ハワイ大学モナ校、ロシア・サハリン国立大学が加わり、6大学の「ESDキャンパスアジア・パシフィック」として開催予定です。教室におけるESD学習ばかりではなく、日常生活の共有を通して



小内学部長（左手前）を表敬訪問する吉原氏（左奥）と貝澤氏（右奥）

達成される学生の国際的な人脈形成によって、世界的課題である持続可能で安心・安全な社会と平和な世界をどのように構築するかを将来にわたって考え続けていける次世代の力量形成が期待されます。

（教育学院・教育学研究院・教育学部）



報告会の様子

## 平成27年度水産科学院・水産学部外国人留学生送別懇談会を開催

2月24日（水）、函館国際ホテルにおいて、平成28年3月をもって修了・卒業する外国人留学生の送別懇談会を開催しました。懇談会には、外国人留学生とそのご家族のほか、函館キャンパスの教職員、さらに国際本部の教職員を含め、約65名の出席がありました。

懇談会は、宮下和夫副研究院長の挨拶に始まり、次いで、国際本部を代表して島竜一郎副本部長が祝辞を述べた後、足立伸次教授の乾杯で開会しました。和やかな歓談の後、修了・卒業する外国人留学生が紹介され、代表者によるスピーチと記念品の贈呈式を行いました。博士後期課程3年のスウェケエマニユエル エンドゥルさん（タンザニア）は、来日した当初の苦労話や思い出、指導してくれた先生への感謝の気持ち、母国への想いや将来への決意など熱意を込めて語り、会場は感動的な雰囲気になりました。

最後は綿貫 豊教授の乾杯の後、参加者全員で記念撮影を行い、懇談会は盛況のうちに閉会となりました。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



挨拶する宮下副研究院長



祝辞を述べる島副本部長



修了者によるスピーチ



歓談中の様子

## 先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2015」を開催

先端生命科学研究院では2月15日（月）に理学部5号館大講堂にて平成27年度FDSD研修会「総会2015」を開催しました。今年度も教育・研究担当の全教員（特任、客員を含む）及び研究室の事務・技術職員を対象とし、同研究院の諸研究・教育活動報告と理学・生命科学事務部の業務報告を実施しました。教員52名、職員34名、総数86名が参加しました。

プログラム第1部では、出村 誠研究院長から本学が取り組む第3期中期目標・中期計画の概説とともに、先端生命科学研究院の第2期の研究推進、教育改革、研究・教育の環境改善や支援への取り組みの概要説明がありました。本研究院で第3期に向けてソフトウェアグローバルステーション（仮称）のGI-CoRE設置、並びに附属次世

代ポストゲノム研究センターの改組計画について紹介されました。大学院・学部教育では「アクティブ・ラーニング22要素への取組状況」について担当教員へのアンケート結果が披露されました。また、生命科学院の3つのポリシー（入学・教育課程・学位授与）に準拠した教育改革の方向性が紹介されました。理学部専門科目で先行実施してきた4学期制4年目の評価、TA・TF制度の活用等の重要性が説明されました。また門出健次副研究院長から次世代ポストゲノム研究棟で実施した「夏の省エネ活動」の効果と課題について総括がありました。

第2部では、理学・生命科学事務部の主要担当ごとに若手代表9名による業務活動報告がありました。教員からの質疑応答もあり、普段聞けない事務

管理の難しさを知る良い機会となりました。研修会終了後には先端生命科学研究院と理学・生命科学事務部の意見交換会も行われ、今後の大学教育・研究環境の改善に教員と事務職員との協働が欠かせないという意識を更に深めることができました。

### ◆開催概要

<http://altair.sci.hokudai.ac.jp/advlfsci/>

（生命科学院・先端生命科学研究院）



会場の様子



出村研究院長



門出副研究院長



理学・生命科学事務部 若手事務職員による報告

## 薬学部で第18回生涯教育特別講座冬季講演会を開催

2月20日（土）に、薬学部臨床薬学講義室において生涯教育特別講座冬季講演会を開催し、薬局や病院などの薬剤師の方々をはじめ、薬学部同窓生や薬学部学生・教員等95名が参加しました。

薬学部生涯教育特別講座は、本学薬学部同窓生を含む医療関係及び関連領域の仕事に従事される方を対象に、医療における諸問題について最新の情報を提供することを目的として実施しています。

はじめに、北海道大学病院腫瘍センターの中積宏之助教から「胃癌及び大

腸癌に対する化学療法：標準治療の実際及び注意すべき有害事象について」の講演があり、消化器がんの化学療法に関して、最新の臨床研究結果も含めて解説がありました。続いて、昭和大学腫瘍分子生物学研究所の藤田健一教授の「抗がん薬のリバーストランスレーショナルリサーチ：至適な薬物療法を目指して」の講演では、抗がん薬治療における臨床上の問題点を解決するために行った研究事例を具体的にご提示いただきました。

会場からは様々な質問が寄せられ、活発な議論が行われました。「非常に

理解しやすかった」「日々の業務に活用していきたい」など、感想も多数寄せられました。

（薬学研究院・薬学部）



講演に耳を傾ける参加者



## 農学研究院で「北海道に即した中核的林業技術者育成プログラムの開発事業」に関わる実証講座と成果報告会を開催

農学研究院では平成27年度文部科学省「成長分野等における中核的専門人材養成等の戦略的推進」事業を受託し、道内の林業行政・研究機関・事業者組織の協力を得て、北海道林業の成長産業化を担う人材の育成プログラムの開発を行っています。事業の一環として、プログラムの実証と林業技術者の方々のステップアップを目指した実証講座を、1月14日（木）・15日（金）に帯広で、1月19日（火）・20日（水）に旭川で開催し、両会場合計で行政機関や森林組合・林業事業者の技術者82名に参加いただきました。低コ

スト型、環境配慮型の森林管理をテーマとして、ワークショップなども取り入れながら最新の技術情報を提供し、終了後のアンケートでも参加者の方々から高評価をいただきました。

また、2月10日（水）には札幌で本事業の成果報告会を行い、約40名の方に参加いただきました。

（農学院・農学研究院・農学部）



旭川会場での実証講座の様子



札幌で開催した成果報告会

## 観光学高等研究センター、メディア・コミュニケーション研究院でジョイントワークショップを開催

観光学高等研究センターでは、メディア・コミュニケーション研究院及び琉球大学大学院観光科学研究科との共催により、2月5日（金）午後1時から同4時30分まで、メディア・コミュニケーション研究院608室において、観光研究ジョイントワークショップ「北海道、沖縄から考える『地方創生』」を開催しました。このワークショップは、「資源の再配分」による資金を活用して実現したものであり、本学、琉球大学からそれぞれ2名の教員が、洞爺湖町、美瑛町、南城市、粟国島の事例に即して、観光による地方

創生の可能性と課題について発表した後、行政と民間との協働、地方文化の観光資源化、体験型消費、あるいは観光を媒介とした新しい公共の構築といった諸論点について問題提起を行い、引き続き総合討議において課題の克服に向けて相互の知見の共有を試みました。北海道と沖縄という、地理的に遠く隔たり、また広大な自然と島嶼部の伝統文化という対照性が一見すると際立っているように思える2つの地域において、観光による地方創生というアプローチで考察を試みれば多くのトピックが共有されていると確認でき

ました。さらにまた、本学と琉球大学の間で初めて試みられた観光研究に関わるこの協働の場を足がかりにして、今後も研究者間及び学生間の交流を継続しつつ、北と南から他の研究組織も巻き込むようにして観光研究のコンソーシアムにつなげていきたいとの認識に至り、その意味においても大変有意義な学術セッションとなりました。

（観光学高等研究センター、国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院）



琉球大学教員による発表



総合討議の様子

## 低温科学研究所が大雪山で18年ぶりに雪の観察実験を実施

低温科学研究所では、2月2日（火）～5日（金）の4日間、大雪山旭岳で「雪の生成過程の解明」を目的とした観察実験を実施しました。

世界で初めて人工雪を作成し、当研究所の設立に大きく貢献した中谷宇吉郎博士も、日本で最も綺麗な雪が降ると言われる大雪山系で雪の観察実験を行っています。中谷博士は人工雪の作成をとおして、雪の結晶の形は雪が作られる上空の湿度と温度によって左右されることを実証し、その関係を「雪は天から送られた手紙である」という

有名な言葉で表しました。今回の実験は中谷博士の研究を始まりとし、当研究所で連続と続けられている、氷の結晶成長メカニズム解明に関する研究の一端です。

今回、旭岳に観察実験用のかまくらを作成し、その中に普段実験室で用いている最新の分析機器（レーザー干渉計や偏光ハイスピードカメラ）を持ち込み、18年ぶりに本格的な雪の観察を実施しました。これまで雪の結晶の生成過程の観察は行っていましたが、今回初めて生成の逆過程である雪の結晶

の蒸発の様子をリアルタイムで観察することで、より雪の生成過程の理解を深めることを目的として実施しました。

今回の実験によって、蒸発による氷結晶の樹枝が短くなる、結晶の厚みが減る過程や速度を初めて同時に測定することができました。さらなる結晶成長メカニズムの解明が期待されます。

今回の実験は各報道機関からの関心も高く、実験の様子や研究者インタビュー等が報道されました。

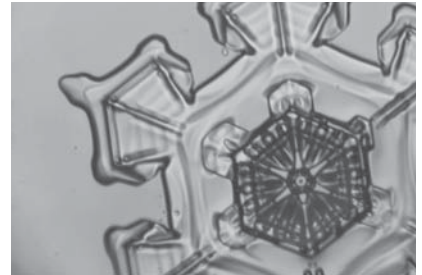
（低温科学研究所）



観察実験用かまくら作成



雪結晶（光学顕微鏡で撮影）



雪結晶（微分干渉顕微鏡で撮影）

## 低温科学研究所でスノーランタンによるライトアップを実施

2月23日（火）、低温科学研究所玄関前から獣医学部付近までの間にスノーランタンを飾りました。このスノーランタンは低温科学研究所の真冬のイベントの一つとして、毎年所属大学院生有志により作成されています。

今年は夕方からの荒天に伴い、残念ながら短時間でのライトアップとなりましたが、低温科学研究所付近を通りかかった方の中には、興味深くライトアップの模様をご覧になれる方もいました。

来年度も引き続きスノーランタンは実施予定です。実施の際にはぜひ一時足を留めていただき、光景をお楽しみいただければ幸いです。

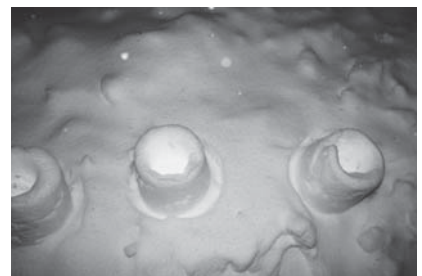
（低温科学研究所）



低温科学研究所玄関前風景



北18条道路風景



作成したスノーランタン

## 総合博物館「卒論ポスター発表会」を開催

総合博物館では独自の教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」の一環として、平成20年度より「卒論ポスター発表会」を開催しています。学部4年生が卒業研究をA0サイズ1枚のポスターにまとめて、市民や観光客の方々、他分野の学生や教職員にわかりやすく発表し、質問に受け答えします。北大生の研究を広く社会に伝えるだけではなく、学生のコミュニケーション能力の向上を図ることを目的としています。8回目を迎えた今年度は、2月27日(土)・28日(日)にインフォメーションセンター「エルムの森」で開催しました。

ポスターとホームページで募集し、発表には工学部から4名、農学部から4名、理学部から1名、文学部から1名の計10名が参加しました。1枚のポスターを完成させるまでに、当館の担当教職員の指導や他の発表者、運営担当学生とのディスカッションを行う中間発表会に参加し、そこで得た意見を取り入れつつ、改訂を繰り返しました。さらに様々な来場者を想定し、それぞれに応じた説明のリハーサルを重ねて準備しました。発表会当日は、緊張しながらも来場者とのコミュニケー

ションを楽しみながら説明していました。

発表会の運営もこれまで通り、学生が担いました。今年度は教育学部と文学部から1名ずつが参加しました。広報ポスターやプログラムの制作ではコンセプトやデザインを一から考え、ポスターでは本学の四季の写真で卒業研究にあてた時間を表現し、プログラムには会場である「エルムの森」にちなんで樹木と建物の格子のイメージを取り入れました。また、中間発表会にも出席し、一來場者の視点からポスターの疑問点や不明点、発表の改善点に至るまで積極的に発言しました。発表会当日には司会や受付を担当し、スムーズに進行するよう発表者をサポートしました。

発表会の最後には、2日間の来場者の投票による「来場者賞」、市民4名と本学教職員6名から成る審査員の評価による「最優秀賞」「優秀コミュニケーション賞」「優秀デザイン賞」が決定しました。「最優秀賞」は農学部の田村紗彩さんが、「来場者賞」は農学部の玉置都華さん、「優秀コミュニケーション賞」は工学部の青葉 桜さん、「優秀デザイン賞」は農学部の和

久井彬実さんと理学部の日下 葵さんがそれぞれ受賞し、表彰式の後には講評会が行われました。

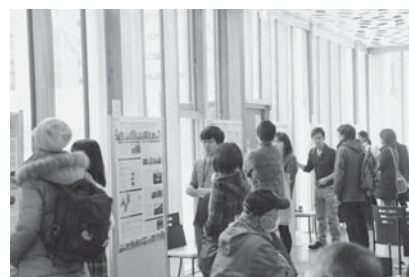
準備のプロセスや当日の様子、参加した学生の事後考察レポートは当館ホームページで随時公開します。

◆<http://www.museum.hokudai.ac.jp/highereducation/storytopic/83/>

(総合博物館)



市民の方に説明する田村さん



「エルムの森」での発表会

## 附属図書館「第4回国際協力カフェ@北大図書館」及び「青年海外協力隊50周年記念展示」を開催

2月12日(金)午後6時30分から、本館オープンエリア(ラーニングコモンズ)において公開トークイベント「第4回国際協力カフェ@北大図書館」を開催しました。

「国際協力カフェ」は、全国で14機関指定されている国連寄託図書館として、附属図書館が国際協力に関わる講師を招いて開催している公開行事です。今回は、昨年50周年を迎えた青年海外協力隊事業を行う独立行政法人国際協力機構北海道国際センター(JICA北海道)とともに主催しました。講師

は、海外での国際協力経験のある3名(本学工学院修士課程1年 三浦舟樹氏、本学保健科学院修士課程修了 今小百合氏、本学法学部卒業 田邑恵子

氏)にお願いしました。

三浦氏からは、昨年11月から12月にかけてJICA主催のインターンシップに参加しザンビアで橋梁の維持管理業



図書展示



写真展示

務などに携わった経験について、今氏からは、理学療法士として2年間タンザニアで活動した青年海外協力隊の体験について、田邑氏からは、JICAや国連開発計画、セーブ・ザ・チルドレンなどでの勤務経験に基づく緊急下での子どもの保護や権利に関する報告がありました。

当日は、市民や高校生を含め46名の参加があり、イベント終了後も、講師を囲んでの質疑応答が盛んに行われま

した。参加者に実施したアンケートからは、「実際に現場で活動した人から直にお話が聞けて良かった」「今後の進路・キャリア形成について学ぶことができた」「それぞれ違う視点からのお話を聞けて面白かった」といった声が寄せられました。

なお、関連イベントとして1月19日（火）から2月19日（金）まで、JICA青年海外協力隊50周年を記念した「国際協力に興味のあるあなたへの

おススメ本」図書展示、青年海外協力隊OB・OGによるメッセージなどのパネル展示、及び田邑氏による「緊急下での子どもの権利について考える本」図書展示、「食卓から見て考えるシリア難民問題の今」と題した写真展示を実施しました。

（附属図書館）



三浦氏の講演



今氏の講演



田邑氏の講演

## 附属図書館本館で北海道地区機関リポジトリ実務担当者研修を実施



研修受講者

附属図書館では、昨年度より開催し好評であった北海道地区機関リポジトリ実務担当者研修を、2月12日（金）に附属図書館大会議室において実施しました。この研修の主催は、北海道大学附属図書館で、後援はデジタルリポジトリ連合です。

研修では、「今更聞けない機関リポ

ジトリのコンテンツ収集と広報」として、機関リポジトリの実務担当者が、共通の課題として持っているコンテンツの収集と広報について、本学などの事例を参考にワークショップ形式で考えること、また道内機関リポジトリ担当者の人的ネットワーク醸成の機会とすることを目的として開催しました。



グループ発表の様子

8大学12名が参加し、参加者からは、「少数数のグループワークだったので気さくな雰囲気良かった」「基本的なテーマだったので参加しやすかった」という声が聞かれました。

（附属図書館）

## ■お知らせ

共済組合員の皆様へ

### 被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに

新たに被扶養者として認定となる場合、又は被扶養者としての資格を失う場合は、組合員証を添えて「被扶養者申告書」を下記の添付書類とともに、速やかに所属部局の共済事務担当係へ提出願います。

なお、届出が30日を超えると、組合員の皆様に不利益（医療費の返還・国民年金等）が生じる場合がありますのでご注意ください。

#### 新たに被扶養者となる場合（認定）

1. 子供が生まれたとき・・・戸籍謄本等
2. 結婚したとき・・・戸籍謄本、住民票謄本、扶養の申立書等
3. 会社を退職したとき・・・戸籍謄本、住民票謄本、扶養の申立書及び雇用保険関係書類等  
※住民票謄本は、世帯主及び世帯主との続柄について謄写省略不可です。  
※配偶者の認定の場合は、同時に国民年金の変更手続きも必要となります。詳細につきましては、所属部局の共済事務担当係へお問い合わせください。

#### 被扶養者が27年度中に満22歳に達し、28年度以降も引き続き扶養する場合（認定更新）

「扶養の申立書（認定更新用）」は、必須書類です。その他の添付書類は、学生：在学証明書等、無職：所得証明書、パート等：給与支給（見込）証明書等です。

※平成28年4月中に、速やかに手続きをお願いします。所得証明書は、27年分収入のため7月初旬に提出してください。

#### 被扶養者としての資格を失う場合（取消）

1. 就職したとき・・・①採用辞令の写し ②採用年月日確認のため在職証明書等  
※①又は、②がかなり遅れるときは、部局等担当者にご相談願います。
2. 死亡したとき・・・埋葬許可証若しくは火葬許可証の写し又は戸籍謄本
3. 所得が増えたとき・・・給与支給（見込）等証明書、年金受給者の場合は年金証書又は年金改定通知書の写し及び申立書、確定申告書の写し等

※将来に向かって1年間（注1）に130万円以上の収入が見込まれるときは、恒常的所得とみなし、見込まれる時点（給与の支給日ではなく、就労開始日等、被扶養者としての要件を欠くに至った事実が生じた日）において取消となります。

（注1）暦年（1月～12月）又は会計年度（4月～翌年3月）という特定の期間の所得ではなく、どの時点からも将来にわたり見込まれる所得です。

（年末調整における所得の見方とは異なりますのでご注意願います。）

※130万円を12ヶ月で割った108,333円を月額限度額として参考にしてください。

※障害年金受給者、60歳以上の公的年金受給者は、180万円以上、月額15万円以上です。

※給与所得とは、通勤手当や賞与等の諸手当を含み、税金等控除前の給与所得総額を指します。手取りの金額ではありませんのでご注意願います。

※収入がある方は、「給与収入（見込）等証明書」と1年間で130万円を超えないこと等を記載した「念書」（就労する本人と組合員）を認定時や要件の確認時等に提出していただきます。その際、3ヶ月平均で、108,333円を超える月があるときは、どうして、月額が108,333円を超過するかの具体的な理由を申立書に追記してください。

※給与支給（見込）等証明書の様式については、所属部局の共済事務担当より指定された様式を使用し提出願います。

※自営業の方は、毎月の収支がわかるように帳簿等をご用意願います。認定取消・認定継続の判断としてください。その上で収入が多い月に注意し、速やかに所属部局の共済事務担当者にご相談ください。

※事業所得等については、必要経費の考え方が所得税法上とは異なり、限定されますのでご注意願います。

(必要経費 仕入れ品の代価(売上原価)、賃金(人件費)、不動産所得の修理費及び管理費、事業所と住居が別の場合の地代家賃、光熱給水費及び通信費)

< 注 意 >

- ①被扶養者としての資格を失っているにも関わらず、扶養取消の手続きをせずに医療機関等で組合員証を使用した場合は、後日その分の医療費を返還していただくことになります。  
特に、例年9月の組合員証等の扶養の確認時、あるいは所得税法上の所得調査等の関係で所得額超過が発覚し、高額な返還金が発生する事例が数多く見受けられますのでご注意願います。  
なお、取消事実が判明したら、共済組合員被扶養者証を使用せず、部局等担当者に早期返戻願います。
- ②取消の届出が30日を超えてなされた場合は、上記の添付書類の他に「遅延申立書」が必要となります。(届出の遅延につきましては、財務省等の監査時においても厳しい指摘を受けていることから、速やかに届出をお願いします。)
- ③認定・取消、いずれの場合も必ず事実発生日を確認できる公的な書類及び証明書等の添付が必要となります。申立書のみでの認定・取消をすることはできませんので、ご承知おき願います。
- ④戸籍謄本等の証明書類については、3ヶ月以内に発行されたものを添付願います。
- ⑤共済組合への提出書類の訂正は、必ず訂正印を使用願います。(砂消・ホワイト不可)
- ⑥申告書、申立書等の申告者等氏名については、必ず署名(ゴム印等不可)となりますのでご注意願います。
- ⑦申告書等への押印については、シャチハタ以外の印鑑を使用し、鮮明に押印願います。
- ⑧申告書の申告年月日、申立書の記載年月日は訂正せず、申告書等を書き直してください。
- ⑨申告書は、認定・認定取消・認定更新はそれぞれを別の申告書でお願いします。
- ⑩不備がある場合は、受理することができないため、提出書類一式を返却させていただくことになります。
- ⑪申告書等の記載は、黒ボールペンを使用し、消せるボールペンは使用しないでください。

上記については一般的な例であり、この他にも認定又は取消の対象に該当する場合がありますので、被扶養者に異動があったときは、速やかに所属部局の共済事務担当にご相談願います。

なお、パートや事業所得及び雑所得(資産運用により生じた収入を含む)の月収入総額(通勤手当等含む)が3ヶ月平均で、108,334円以上となった場合は、給与証明書等を取り寄せ、見込みが年額130万円以上の場合は、認定取消手続きをし、見込みが年額130万円未満の場合は、申告書、申立書を所属部局の共済事務担当に提出し、認定が更新されます。

また、引越しをされて住所が変更になった場合は、「記載事項変更申告書」を所属部局の共済事務担当へ提出願います。その場合、組合員証等の住所は、ご本人で修正願います。

(文部科学省共済組合北海道大学支部)

## ■ 監事退任にあたって

本年3月31日限りで監事を退任される方々のお言葉と略歴を紹介します。

### 監事

よねざわ つとむ  
米澤 勉 氏



この6年間を振り返って強く記憶に残るのは「東日本大震災の津波」による荒廃したまちと福島の放射能汚染である。もう一つは大学法人化前後から関係者には覚悟があったと思うが「大学改革」であり、文科省主導の改革加速である。前者は復興の視点で関係行政を回ったりもしたが、福島大学の防災リスク管理再考が印象深い。後者は交付金圧縮基調下での世界ランキングに起因する事業費獲得競争と研究組織の拡大、国際化が喧しい印象である。何れも見通しがあるような…、不透明感は拂拭し切れていない共通性がある。

一方で監事の役割が学内で未だにご理解いただけないウラムはあるものの、その役割を強化しようという法整備の下に引き続き職責を果たさざるを得ない公職である。学内にはPDCAのCAを支援する立場とお考え戴きたい。直近の1年で全国180名の監事が監査業務を正しく熟するための指針の整備や市民社会に情報を発信する公式ホームページを開設した。大学当局と監事との相互理解を促す目的でホームページを偶に覗いて戴きたい。

被災地を回りながら『方丈記』を思った。減んだり興ったりする原因はさまざまであるが、人智の及ばぬ「まちの流転」は宿命であろうか。同時に人間の営みが続く限り、教育研究機関も未来永劫改革して行かねばならない道理である。お役に立てた実感は無く、大学との意思の疎通に欠けていた環境を振り返りながら、北海道大学の持続的発展を祈念し退任のご挨拶と致します。

### 略 歴

工学博士（都市計画学，まちづくり論）  
技術士（都市および地方計画）

平成22年4月 北海道大学監事  
平成25年1月 } 国立大学法人等監事協議会副会長  
平成26年12月 }  
平成27年1月 } 国立大学法人等監事協議会会長  
平成28年3月 }

### 監事

うえの まさみ  
上野 昌美 氏



平成22年4月に非常勤監事に就任し、本年3月をもって退任いたします。

在任期間の6年間は、第2期中期目標期間と重なりました。就任した時点では、「監事は監査すること」という漠然とした規定があるだけで、監事の役割は明確ではありませんでした。会社法監査などの会計分野を職業としていたので、財務についての意見を通じて監事としての職責を果たせるのではないかと考えたのですが、国立大学法人会計基準には独特な会計処理があって分かりにくく、大学の財務の実態に迫りきれませんでした（国立大学の情報開示の一環として会計基準の改定が望まれるところです）。その後、法改正によって、監事の職務が明確化され、中期目標の達成状況や内部統制の整備状況にも意見を述べることになりました。しかし、この分野でも十分な貢献はできず、在任期間が同じだった常勤監事の活躍に依存した6年間になりました。

私の在任期間中には国立大学を巡る環境が著しく変化し、その意義が問われ続けました。北海道大学では、2026年の創基150年に向けた「北大近未来戦略150」を策定し、世界トップレベルの研究、国際性豊かな人材育成、学外との広範な連携を主要な目標にかかげました。今後も続く激しい環境変化の下では、この目標を達成するためには根本的なガバナンス改革が必須となるでしょう。北海道大学が創基150年に向けて着実に前進していくことを期待し、今後は同窓生の一人として応援していきたいと思っております。

### 略 歴

生 年 月 日 昭和22年11月30日  
昭和47年3月 北海道大学経済学部卒業  
昭和51年3月 北海道大学大学院経済学研究科博士課程中退  
昭和51年4月 } 北海道大学経済学部助手  
昭和54年3月 }  
昭和55年11月 } 札幌中央監査法人（現 あずさ監査法人）  
昭和63年12月 }  
平成元年1月 上野公認会計士事務所所長  
平成22年4月 北海道大学監事

## ■ 定年退職を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年退職される方々のお言葉と略歴を紹介します。

### 文学研究科教授

たかはし ひでみつ  
高橋 英光 氏



私は学生時代を北海道大学で過ごしましたが、北大学生になった昭和46年頃は学生運動の影響で休講が続き、大学生活に馴染むのに苦労しました。当時は文類という大きなユニットに入学しましたが、文学部に進むことを決めた時には、級友から就職がないぞと言われたのを覚えています。しかし、英語学そして言葉と心の働きを考える学問（後の認知言語学）への興味が止まらなく大学院に進み、その後、35才の時に縁があって北大教員となりました。文学部・文学研究科の教員として過ごした29年間は大学改革の嵐が吹き荒れ、小講座の解体と大講座化、大学院重点化、カリキュラム改革、法人化と続き、これと平行して大学・学問のデジタル化が急速に進みました。

これらの変化に適応するのは楽ではありませんでしたが、文学部・文学研究科にいられて本当に幸運でした。たくさんすばらしい学生と出会い、各分野の最前線で活躍されている同僚、図書館のすばらしい蔵書・施設に囲まれ、狭い流行に流されずに大きな目標を立てて自分がやりたい学問を続けることができました。やるべきことはまだ山積していますが、これまでお世話になった諸先生と事務職員の方々に心より御礼申し上げます。人生の大半を過ごした文学研究科と北海道大学のますますのご発展をお祈りします。

### 略 歴

生年月日 昭和27年12月14日  
昭和50年3月 北海道大学文学部文学科卒業  
昭和53年3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了  
昭和55年10月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程中途退学  
昭和55年11月 北海道大学文学部助手  
昭和57年10月 小樽商科大学商学部講師  
昭和62年4月 北海道大学文学部助教授  
平成4年8月 } 米国カリフォルニア大学サンディエゴ校言語学科にて研修  
平成5年8月 }  
平成8年6月 北海道大学文学部教授  
平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科教授  
平成16年12月 博士（文学）（北海道大学）

### 文学研究科教授

さとう れんたろう  
佐藤 錬太郎 氏



赴任してから29年が経過し、30年目の春を迎えました。平成12年に大学院重点化が実現した頃から中国や台湾からの留学生が増え始め、今では日本人学生よりも留学生の方が多くなりました。また、私自身も中国語を常用するようになり、中国語圏の国際会議に参加する機会が増えました。平成21年には台湾大学に客員教授として招聘され、専門とする陽明学の演習と講義を担当しました。台湾の研究者との交流は今も続いています。平成23年3月11日の東日本大震災の大津波の時には、台湾から安否を気遣うメールが届きました。政府も電力会社も経済的観点から原発を維持しようと躍起になっていますが、福島第一原子力発電所では、今なお放射能の影響が深刻です。将来世代への倫理的・道義的責任を放棄して良いのでしょうか。また、中国の海洋進出に対抗すべく、日本政府は兵器の輸出条件を緩和して軍事産業を保護する政策を進めています。一旦戦争になれば、日本列島全体が核兵器の惨禍を被る可能性があります。軍備をどんなに強化しても、日本を守りきることでできません。内村鑑三の言うとおり、人を殺す戦争に正義の戦争などありません。平和主義を堅持すべきです。

北大が今後も世のため人のためになる人材を輩出することを願いつつ筆を置きます。北大の益々の発展と皆様の健康を祈ります。

### 略 歴

生年月日 昭和28年3月8日  
昭和52年3月 東京外国語大学外国語学部中国語学科卒業  
昭和55年3月 東京大学文学部第1類（文化学）卒業  
昭和57年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了  
昭和62年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学  
昭和62年4月 北海道大学文学部助教授  
平成9年6月 北海道大学文学部教授  
平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科教授  
平成21年3月 } 国立台湾大学中国文学系客員教授兼務  
平成21年7月 }  
平成25年9月 北京外国語大学日本学研究中心客員教授兼務



## 文学研究科教授

やまだ ていぞう  
山田 貞三 氏

私は、昭和46年に北海道大学の文類に入学し、文学部のドイツ文学を専攻しました。理由は単純で、それまで道東の田舎町で時折読み耽っていたドイツ文学の作家たちのテキストを原文で味わってみたかったからです。当時のキャンパスには、まだ藪や雑草の生い茂る空き地もあって、かなり野放図な雰囲気の中で学生生活を送ったような気がします。

あり難いことに昭和53年、長崎大学教養部に採用され、在職中の2度のドイツ留学で、ドイツ文学の研究に専念し、ベルリンの壁が崩壊する前後のドイツを目の当たりにすることができました。

北大文学部への着任は、平成7年3月20日－あの地下鉄サリン事件の当日で、忘れられない日付です。それから20年の日々は、恵まれた教育研究環境の中で充実した生活を送らせていただきました。一つだけ想定外だったことは、平成16年の国立大学法人化以降、大学評価の仕事を担当する仕儀となり、定年間近になってなお、ひょうか、ひょうか、と急ぎ立てられていることです。大学の自己評価が国家によって法制化されるというのは、本来、忌々しき事態と言わざるをえません。この評価結果が、大学運営の根幹を揺るがす影響力をもっていることも事実です。微力ながら最後まで奉職し、これまで受けた皆様のご厚情に応えたいと願っております。

## 略 歴

生年月日	昭和27年5月26日
昭和50年3月	北海道大学文学部卒業
昭和52年3月	北海道大学大学院文学研究科修士課程修了
昭和53年9月	北海道大学大学院文学研究科博士課程退学
昭和53年10月	長崎大学教養部助手
昭和55年3月	長崎大学教養部講師
昭和61年12月	長崎大学教養部助教授
平成3年1月	長崎大学教養部教授
平成7年3月	北海道大学文学部教授
平成12年4月	北海道大学大学院文学研究科教授
平成17年4月	北海道大学大学院文学研究科副研究科長
平成20年3月	
平成21年4月	北海道大学役員補佐
平成26年3月	
平成26年4月	北海道大学総長補佐
平成28年3月	

## 医学研究科教授

にしむら まさはる  
西村 正治 氏

私は昭和52年に北海道大学医学部を卒業して、当時の村尾誠教授率いる第一内科に入局しました。その後、砂川市立病院、国立函館病院での臨床研修を経て大学病院に戻り、昭和60年7月から同63年3月までのボストンへの留学期間を除いて、ずっとこの医学研究科と病院のなかで研究、臨床、教育に従事してきました。医学部を卒業した当時はひたすら良き臨床医になりたいと熱望していたので、まさかこのように人生の大半を大学組織のなかで送ることになるとは夢にも思いませんでした。私が臨床医としての道に加えて、教育・研究に生きがいを見つけられたこと、これまでの人生を心から幸せであったと感じるのも多くの素晴らしい人々との出会いがあったからです。

つらいと感じたことは、平成13年に臨床分野の教授として就任して以後、関連病院人事に一定の責任を持たざるを得なかったことです。医師不足、とりわけ私の専門とする呼吸器内科医の不足は深刻であり、多くの期待に十分に答えることができませんでした。一方、我が教室から筑波大学、慶應義塾大学等へ呼吸器内科教授を輩出できたことは（故）村尾誠名誉教授、川上義和名誉教授の積み上げてきた呼吸器病学の輝かしい伝統を維持できたという意味で誇りとするところです。

退職後もあと2年間は素晴らしい仲間と環境に囲まれつつ、本学における最後のご奉公をしたいと思っております。

## 略 歴

生年月日	昭和28年1月30日
昭和52年3月	北海道大学医学部卒業
昭和52年10月	砂川市立病院内科医員
昭和53年10月	国立函館病院内科医員
昭和54年4月	北海道大学医学部附属病院第一内科医員（研修医）
昭和54年5月	北海道大学医学部附属病院第一内科医員
昭和60年6月	医学博士（北海道大学）
昭和60年7月	米国マサチューセッツ総合病院呼吸器科
昭和63年4月	北海道大学医学部附属病院第一内科助手
平成4年8月	北海道大学医学部附属病院第一内科講師
平成9年6月	北海道大学医学部附属病院第一内科助教授
平成13年1月	北海道大学大学院医学研究科教授、 北海道大学病院内科I科長
平成22年4月	北海道大学病院副病院長
平成25年3月	

医学研究科教授

ありが ただし  
有賀 正 氏



私と北海道大学との関わりは、札幌オリンピックが開催された昭和47年の北大入学からでした。今も、発表を見に雪解けでグチャグチャになった道を歩いて行ったのを覚えています。北大を卒業し、すぐに北大小児科に入局したのが昭和53年で、北大医54期です。以降、関連病院で研修したり、医員、研究生で診療・研究をしたり、留学したりしましたが、基本は北大小児科でした。平成11年に松本脩三名誉教授が設立してくださった寄附講座：遺伝子治療講座で崎山幸雄教授の指導の下で客員助教授となって研鑽を積み、5年後の平成16年から小児科の教授に就任しました。青天の霹靂と言われました。この12年間で北大小児科の伝統を守り、さらに発展させられたかどうか、皆様の評価を待ちたいと思います。

世間をアツと言わせることや、就任前の寄附講座時代に実施した遺伝子治療を超えることはできませんでしたが、3代目の山田尚達名誉教授が立ち上げた理念“オールラウンドの小児科医（小児の総合医）”を育てること、そして研究のレベルアップの努力はしたつもりです。支えてくれた数え切れない多くの方々に感謝するとともに、北大の益々の発展を祈念しております。

略 歴

生 年 月 日 昭和27年 7月10日  
 昭和53年 3月 北海道大学医学部卒業  
 昭和63年 9月 } ハーバード大学医学部リサーチフェロー  
 平成元年 9月 }  
 平成 2年 9月 医学博士（北海道大学）  
 平成11年 4月 北海道大学医学部遺伝子治療（寄附講座）客員助教授  
 平成16年 4月 北海道大学大学院医学研究科教授

医学研究科教授

たまき ながら  
玉木 長良 氏



昭和53年に京都大学医学部を卒業し2年間の内科研修後、博士課程での4年間の研究を経て、核医学、特に循環器領域の機能画像診断を中心に、PETや分子イメージングの研究、教育に従事してきました。平成7年10月から医学研究科核医学分野の教授として20年間お世話になりました。ちょうど北大病院にサイクロトロンやPET装置を導入する時期にも恵まれ、優秀な教室員や研究者に囲まれて、PETや分子イメージングに関する先駆的な研究に従事することができました。平成18年からは産学連携プロジェクトの一つ、未来創薬・医療イノベーション拠点形成の医療側の総括責任者を務める機会を得ました。この10年の大型研究プロジェクトを通して、これからの大学が求められる産学官の連携や、学部や大学の垣根を越えた幅広い分野の人材育成に尽くすことができました。また、平成23年から2年という短期間ではありましたが、医学研究科長・医学部長を務め、大学医学部の諸問題に取り組み貴重な経験もさせていただきました。

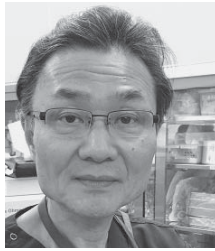
北海道大学は先駆的な教育研究をする恵まれた環境があります。若手の教職員がこれから活動の輪を広げ、北海道大学がさらなる発展を遂げられることをお祈りします。

略 歴

生 年 月 日 昭和27年 7月26日  
 昭和53年 3月 京都大学医学部医学科卒業  
 昭和55年 3月 神戸市立中央市民病院臨床研修医  
 昭和59年 3月 京都大学大学院医学研究科博士課程修了  
 昭和59年 3月 医学博士（京都大学）  
 昭和59年 4月 京都大学医学部助手  
 昭和59年11月 } 米国ハーバード大学医学部研究員  
 昭和61年 9月 }  
 平成 3年 7月 京都大学医学部講師  
 平成 7年 9月 北海道大学医学部教授  
 平成18年 4月 } 北海道大学役員補佐  
 平成19年 4月 }  
 平成19年 4月 } 北海道大学病院副院長  
 平成22年 3月 }  
 平成23年 4月 } 北海道大学大学院医学研究科長・医学部長  
 平成25年 3月 }

## 医学研究科教授

がんどう さとし  
丸藤 哲 氏



平成11年に医学研究科救急医学分野初代教授を拝命しました。救急医学分野は北海道では初めての救急医学講座です。全くの0から救急医学と救急医療を開始しましたが、皆様の温かいご支援をいただき、救急医学・医療体系を構築できました。この場を借りて御礼申し上げます。開講当時は救急医学が独立した学問体系であると理解する方は皆無でしたが、任期を通じて独立性の敷衍に貢献できたと思料します。「救急とはシステムである」が私の持論ですが、北海道及び札幌市の救急医療システム構築に微力ながら貢献できたことを嬉しく思います。

救急医学分野開講当時の北海道大学病院は、北海道大学教職員・家族、学生・留学生の急病や北海道大学構内の救急事故に対応する能力を持ち合わせていませんでした。平成12年の三次救急医療開始にあわせて、北海道大学の全ての救急傷病者に対応可能な救急部（現 先進急性期医療センター）を立ち上げました。お世話になった北海道大学へのご恩返しが出来たと考えています。母校北海道大学の益々の発展を祈念いたします。

## 歯学研究科教授

すずき くにあき  
鈴木 邦明 氏



学生時代を含めて44年間、途中3年間の留学を除いて、このキャンパスでお世話になりました。つらかったことなどは忘れてしまい、いい思い出だけがよみがえります。

学生時代はワンダーフォーゲル部に所属し、様々な学部先輩・同期・後輩と語り、四季折々の北海道の山々を歩きました。人とのつながり、山とのつながりの原点で私の宝物です。また、全学教育を受けた旧教養部の裏に昔の恵迪寮があり、寮生でもないのに講義のない時間帯には友人のいた大部屋によく行きました。開け放しの窓から初夏の気持ちの良い風が入り、恵迪の森の郭公の声が聞こえてきました。北大構内はまさに学生の庭であり、懐かしい日々です。

歯学部を卒業した後は開業歯科医になるつもりでしたが、4年間だけのつもりで入った大学院でNa,K-ATPaseという酵素と恩師に出会い、研究の面白さにはまったことがきっかけで教育・研究に携わることになりました。豊かな自然にあふれたキャンパスでずっと過ごせたことは幸せなことで、北大には感謝の念でいっぱいです。社会が変わり、大学も変わり、これからは大変だと思いますが、北大のますますの発展をお祈りします。ありがとうございます。

## 略 歴

生 年 月 日 昭和27年11月22日  
 昭和54年3月 北海道大学歯学部歯学科卒業  
 昭和55年3月 北海道大学大学院歯学研究科博士課程中途退学  
 昭和55年4月 北海道大学歯学部助手  
 昭和59年6月 歯学博士（北海道大学）  
 平成7年4月 北海道大学歯学部助教授  
 平成12年4月 北海道大学大学院歯学研究科助教授  
 平成13年8月 北海道大学大学院歯学研究科教授  
 平成19年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員  
 平成26年3月 }  
 平成19年4月 } 北海道大学大学院歯学研究科副研究科長  
 平成23年3月 }  
 平成23年4月 } 北海道大学大学院歯学研究科長・歯学部長  
 平成26年3月 }

歯学研究科教授

いいた じゅんいちろう  
飯田 順一郎 氏



平成11年11月1日に北海道大学に着任して以来、あっという間の16年間余でした。赴任初日に北13条門を入った途端、黄金色のイチョウ並木が迎えてくれた時の感動が忘れられません。大所帯の教室員には好意的に受け入れてもらい、教授会にも温かく迎えていただきました。今日まで心地良く研究・教育・臨床に従事することができたことに、心から感謝いたします。

振り返りますと、この間、我々を取り巻く研究・教育・臨床の環境は大きく変化したものだと感じます。医学・歯学教育における全国レベルでの共用試験の実施、学会における専門医制度の立ち上げなど、一連の改革の作業に関わりながら、そこに大きなエネルギーを注いだ気がしています。また、矯正歯科治療は歯科の中でも技術的に専門性の高い診療ですので、その卒後臨床教育体制の充実にも力を注いで来ました。更に大学院生にも恵まれ、地道に基礎的な研究を進められたことは幸せなことでした。加えて最後の4年間は北海道大学病院の歯科担当副病院長を拝命し、北大病院外来新棟の新築にも関わられたことは特筆すべき経験でした。今後の2年間、特任教授として最後の締めくくりの時間を有意義に使っていきたくと考えています。伝統ある北海道大学の今後益々の飛躍的な発展を期待しています。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和27年 7月24日
- 昭和53年 3月 東京医科歯科大学歯学部歯学科卒業
- 昭和57年 3月 東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了
- 昭和57年 3月 歯学博士（東京医科歯科大学）
- 昭和57年 4月 東京医科歯科大学歯学部附属病院助手
- 昭和58年 1月 東京医科歯科大学歯学部助手
- 平成 4年11月 東京医科歯科大学歯学部講師
- 平成 7年 2月 東京医科歯科大学歯学部助教授
- 平成11年11月 北海道大学歯学部教授
- 平成12年 4月 北海道大学大学院歯学研究科教授
- 平成23年 4月 北海道大学教育研究評議会評議員、
- 平成24年 3月 北海道大学大学院歯学研究科副研究科長
- 平成24年 4月 北海道大学病院副病院長
- 平成28年 3月

獣医学研究科教授

はばら よしあき  
葉原 芳昭 氏



アナログ時代からデジタル時代

大学院生時代は、まだアナログ主流であった。一部のマニアはTK-80を活用していたようだ。ある大学に勤務した頃、各社が恐る恐る製品を出し始めた。高価なため個人での購入は無理であったが、幸い、機能は限定されているが、比較的安価なCASIO FX-702Pという簡易プログラミング可能な機種が売り出され、妻に無理を言って入手した。極めて簡単な有意差検定プログラムをBASICで作成して利用したが、正確かつ瞬時に結果を得ることができ、将来の普及を予感した。当時、計算機は高価なおもちゃという感覚で、事務機器としての購入は憚られた。科学研究費での購入など私の領域ではもってのほかであった。ところが、研究室でソーテックの計算機を何故か購入したことから、幾分込み入ったプログラムにチャレンジした。なかなか思い通りに動かないプログラムの不備と修正法を夜半に思いつき、研究室に戻って忘れないうちに素人ながらデバッキングした。一区切りついた頃には空が明るくなり始めていたのは良い思い出である。それを当時取り組んでいたラジオイムノアッセイの標準曲線作成とホルモン濃度算出に役立てた。まだまだ続きがあるが、使い方次第では恐ろしいデジタル機器の発達とともに歩んできた三十数年であったようにも思う。

水産科学研究院教授

やべ まもる  
矢部 衛 氏

私の北大での生活は、昭和47年春に学生運動のため入学式もないまま始まりました。水産学部を卒業し大学院に進学後、魚類の比較形態学と系統分類学に一貫して取り組んできました。特に、北海道の魚とも言えるカジカ類を研究対象にしたことで、北大のイメージに合致した教育・研究ができたと考えています。また、生物多様性の重要性が認識されてきた頃でもあり、水産科学における生物多様性教育の一端を分類学の観点から実践してきました。研究活動においても、国内はもとよりロシア極東域、千島列島、ベーリング海などでのフィールド調査を通じて新種の魚類を数多く記載し、北東アジアの魚類の種多様性の解明に若干なりとも貢献できたと考えています。

また、研究室に入った頃は5万点程度であった魚類の標本が、現在では約22万点までに充実し、HUMZコレクション（北海道大学総合博物館魚類学術標本）として国内外に認知されるまでになりました。これらの標本は長年の間、著しく老朽化した標本館に保管されていましたが、皆様のご理解のもと学内経費で新営していただけることになり、3月末に完成いたします。私にとって新標本館の完成を退職前に見届けられることができるのは何よりの喜びです。

入学以来43年間、学舎、職場として過ごしてきた北海道大学を卒業するにあたり、この間を様々な形でご指導、ご鞭撻いただいた数多くの皆様に深く感謝申し上げます。

## 略 歴

生年月日 昭和27年12月29日  
 昭和51年3月 北海道大学水産学部水産増殖学科卒業  
 昭和53年3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了  
 昭和58年3月 北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程単位取得退学  
 昭和58年4月 日本学術振興会奨励研究員  
 昭和59年3月 水産学博士（北海道大学）  
 昭和59年9月 北海道大学水産学部助手  
 平成4年4月 北海道大学水産学部講師  
 平成7年4月 北海道大学水産学部助教授  
 平成18年4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

水産科学研究院教授

いまい いちろう  
今井 一郎 氏

凌雲の志を抱いて函館の地を踏み早7年、気付けば定年の時を迎えました。北海道大学で多くの学生さん達と邂逅し、研究を飛躍的に進展できたことにまず感謝します。瀬戸内海や九州沿岸を中心に発生する有害赤潮の防除に関して、アマモ場や藻場の殺藻細菌を活用する為の基礎的研究、海底で眠る珪藻類の休眠期細胞を有光層に持ち上げ発芽復活させ、栄養細胞の増殖を通じて水中の栄養塩の消費により有害赤潮の発生を抑制する為の研究、陸水ではアマモ場のアナロジーで水草の殺藻細菌を活用したアオコ予防に関する研究を大沼で発展させました。海藻やアマモ、水草や葦に生息する有用な殺藻細菌を、赤潮やアオコの抑制戦略として活用することは、近い将来の環境に優しい世界のトレンド技術になると確信します。また、北極海での有毒プランクトン（特に麻痺性貝毒原因種）のシスト研究は、北極海で大規模な貝の毒化が起こることの警鐘となり、アラスカ沿岸住民の食の安全に寄与できたと信じています。

函館では、専門書の単著での出版、及び赤潮貝毒研究の最高峰となる専門書の編集出版という夢を果たしました。大学院教育においては、博士課程学生の学位論文審査で副査として著名な米国人科学者のヴェラ・トレイナー博士（国際有害毒藻類学会会長）を招聘できたことに大変満足しています。北海道大学の教育研究におけるグローバル・スタンダードの構築に向け、新たな展開を例示できたと自負します。

最後に、北海道大学での教育研究生活に感謝し、本学の更なる発展を祈りつつ筆を置きます。

## 略 歴

生年月日 昭和28年1月6日  
 昭和52年3月 京都大学農学部水産学科卒業  
 昭和54年3月 京都大学大学院農学研究科水産学専攻修士課程修了  
 昭和55年3月 京都大学大学院農学研究科水産学専攻博士課程中途退学  
 昭和55年4月 水産庁南西海区水産研究所研究員  
 昭和63年4月 水産庁南西海区水産研究所主任研究官  
 平成元年7月 農学博士（京都大学）  
 平成2年4月 水産庁南西海区水産研究所赤潮環境部赤潮生物研究室長  
 平成6年10月 京都大学大学院農学研究科助教授  
 平成14年4月 京都大学大学院地球環境学助教授  
 平成21年4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

水産科学研究院教授

もんたに しげる  
門谷 茂 氏



私が北大に入学した昭和46年の札幌は、オリンピック関係の工事などで活気に溢れていた。授業への出席率はあまり高くなかったが、その代わりにひたすらあらゆるジャンルの本を読んだ。研究者になるという漠然とした気持ちだけで入学したので、専門を選択するのにはずいぶん時間がかかった。結局「有機地球化学」という、全く食えない分野を選んでしまった。博士課程3年時に初めて応募した助手公募で何故か採用され、赤潮研究の権威であるボスのもとで植物プランクトンの培養法などを一から修行することになった。研究は、瀬戸内海などの沿岸浅海域の低次生物生産と環境因子の相互応答などを中心とする、海洋生態学と生物地球化学を融合した形で進めた。とりわけ干潟や河口域などの陸と海の接点、境界領域を主要なフィールドとして新たなアプローチを試みてきた。北大に移ってからは、道東の汽水域を中心として亜寒帯域の浅海生物生産構造を解明する努力を重ねた。未だ道半ばというのが、正直なところであるが、研究のプラットフォーム作りはそれなりに出来たのではないかと自負している。

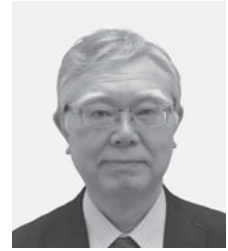
昨今、「選択と集中」ということで、業績の出にくいマイナーな学問分野は、極めて厳しい環境に置かれているが、このような部分にこそ、次世代のブレイクスルーの萌芽があるはずである。数々のフロンティアを開拓してきた北大で、マイナーな学問分野でも息長く研究が進められるような環境作りを切に願っている。

略 歴

生 年 月 日 昭和27年 9月23日  
 昭和50年 3月 北海道大学水産学部水産科学科卒業  
 昭和52年 3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了  
 昭和55年 3月 北海道大学大学院水産学研究科博士課程単位取得退学  
 昭和55年 4月 香川大学農学部助手  
 昭和57年 9月 水産学博士（北海道大学）  
 昭和62月 7月 香川大学農学部助教授  
 平成 6年11月 香川大学農学部教授  
 平成14月 4月 北海道大学大学院水産科学研究科教授  
 平成17月 4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

地球環境科学研究院教授

たなか しゅんいつ  
田中 俊逸 氏



昭和55年理学部化学科の助手として採用され、最初の10年ほどは主に教養部の化学実験の準備や企画、そして指導を担当した。大講座制で分析化学、無機化学、物理化学、有機化学の分野の多くの先生方から学んだことがその後の研究教育に大いに役立った。とりわけ恩師の吉田仁志先生、多賀光彦先生の研究室で両先生の指導を受けるとともに、その研究室に集まっていた多彩で才能豊かな学生達と一緒に研究できたことは幸運であった。平成5年地球環境科学研究科に異動してからは、研究の方向性に苦慮したが、それまでに行ってきた計測化学、分離科学に基づいて環境修復学を立ち上げることができた。21世紀COEプログラムを契機に環境科学院が平成17年に創設され、異分野融合の新たな専攻に参画しながら、JENESYS、EPEES、PAREなど横文字のプログラムに関与する羽目となった。あつと言う間に36年が過ぎ去ったが、いずれもいまだ道半ばであり達成感はないが、退職を機に多くは後進に道を譲ることにしたい。

長きにわたり、私に教育と研究をする機会を与えてくれた北大と、私の研究教育活動を支えてくれた多くの方にこの場を借りて謝意を示したい。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年 4月 1日  
 昭和51年 3月 東北大学理学部化学科卒業  
 昭和54年 3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了  
 昭和55年 9月 北海道大学大学院理学研究科博士後期課程退学  
 昭和55年10月 北海道大学理学部助手  
 昭和62年 6月 理学博士（北海道大学）  
 平成 4年11月 北海道大学理学部助教授  
 平成 5年 4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授  
 平成11年11月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授  
 平成17年 4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授  
 平成25年10月 } 北海道大学大学院地球環境科学研究院副院長  
 平成27年 9月 }

## 理学研究院教授

はべ あさお  
羽部 朝男 氏

宇宙物理学の分野で、銀河の形成と進化に関わる理論研究を続けました。博士課程の頃に、国産のスーパーコンピューターが使えるようになり、計算方法を工夫して、当時としては世界的に見ても大規模な計算を行って研究をしました。例えば、銀河中心の巨大なブラックホールが周りのガスに与える影響を調べ、銀河構造と関連させて、ガスが巨大ブラックホールに急速に流れ込む可能性を示しました。このような過程は、宇宙の初期の銀河で巨大ブラックホールを急速に成長させる可能性の一つとして考えられています。また、銀河の形成進化にとって重要と考えられる「分子雲衝突による星形成」を調べ、その特徴を明らかにしました。最近それとよく対応する構造が名古屋大学の観測グループによって発見され、共同研究に進んでいます。さらに、宇宙論的に形成される銀河団の構造への宇宙モデルの影響なども調べました。これは、ダークマターやダークエネルギーの存在が明確になりつつあることを意識したものでした。宇宙に関する知見が大きく広がる時期に、研究に携わることができたのは大変幸運だったと思います。

大学をめぐる状況が大変厳しくなっていますが、学術を大切にしたいと考えています。

## 略 歴

生 年 月 日 昭和28年1月22日  
 昭和50年3月 北海道大学理学部卒業  
 昭和53年3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了  
 昭和56年3月 北海道大学大学院理学研究科博士課程単位修得退学  
 昭和56年4月 } 日本学術振興会奨励研究員  
 昭和57年3月 }  
 昭和57年12月 理学博士(北海道大学)  
 昭和60年2月 北海道大学理学部助手  
 平成3年8月 北海道大学理学部講師  
 平成6年4月 北海道大学理学部助教授  
 平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助教授  
 平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院助教授  
 平成19年4月 北海道大学大学院理学研究院准教授  
 平成23年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

## 理学研究院教授

いずみや しゅういち  
泉屋 周一 氏

この度、無事定年退職を迎えることとなりました。4月からは、理学研究院特任教授として再雇用される予定なので、なにか実感がわかないと言うのが正直な感想です。

思えば、18歳で北大に入学して以来、最初の職場である奈良女子大学に居た6年余りと、英国に2度、長期滞在した1年半を除けば、ずっと札幌に居住し、北大キャンパスで研究・教育に励んできました。学生時代は大学紛争の影響もまだわずかながら残っていた時代で、当時の学生は自分も含めて随分と生意気だったように思えます。特に、最初の職場が女子大学だったため、北大に赴任した当初は、ほとんどが男子学生のクラスで教えることに少々不安な気持ちでいたことを思い出します。しかし、昭和60年当時の学生は、自分の時代と比べると、とても紳士的で、その後、可もなく不可もなく今日まで講義を続けることができました。一方、数学という抽象的な学問を研究してきた身としては、「日本は物作りの国である」という風潮にどうしても違和感を持ちながらの毎日でした。頭脳さえあれば、高額な実験設備などなくとも、いくらでも世界的な成果を上げられ、おまけに世の中の様々な構造に本質的に影響する、コストパフォーマンスの良い数学という分野の価値をもっと日本の社会は認めても良いと思います。

## 略 歴

生 年 月 日 昭和27年7月7日  
 昭和50年3月 北海道大学理学部卒業  
 昭和53年3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了  
 昭和53年11月 北海道大学大学院理学研究科博士課程退学  
 昭和53年12月 奈良女子大学理学部助手  
 昭和59年9月 理学博士(北海道大学)  
 昭和60年2月 北海道大学理学部講師  
 昭和62年2月 北海道大学理学部助教授  
 平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科教授  
 平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

メディア・コミュニケーション研究院教授

そのだ かつひで  
園田 勝英 氏



私が北大で英語を教え始めた頃から比べると、北大の英語教育は大きく変貌した。辞書をひたすら引きながら英文を読み進む練習をする「講読」と言われる形態の授業が表舞台から去り、様々な方法や手段が試され実践されるようになった。その変化をもたらした根本的要因は、ムーアの法則に象徴されるコンピュータの発達とそれによる社会の変化であった。今やかつてのスーパーコンピュータはポケットの中におさまり、我々の言うことを「理解」する。その一方で、過去半世紀の間に長足の進歩を遂げた言語学には、いまだに多くの根本的問題が未解決のまま残されている。英語教育学も、どういうことをどれくらいの時間をかけて学習すれば英語が「出来る」ようになるのか、今もって明確に答えられない。

このような渾沌とした状況の中で—いや、むしろそうであったからこそ—英語に関連する教育と研究に、自由にまた意欲的に取り組むことができたと思う。これを支え可能にくださった、同僚の諸先生、事務の方々、学生の諸君に感謝したい。しかし、この混乱はいずれ何らかの形で収束するだろうが、そのときに北大の英語教育はどのようなになっているだろうか…思いは尽きない。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和28年 2月 8日
- 昭和51年 3月 東京教育大学文学部英語学英文学専攻課程卒業
- 昭和53年 3月 東京学芸大学教育学研究科修士課程修了
- 昭和53年 4月 小樽商科大学商学部助手
- 昭和54年 4月 北海道大学文学部講師
- 昭和59年 4月 北海道大学言語文化部講師
- 昭和59年12月 北海道大学言語文化部助教授
- 平成13年10月 北海道大学言語文化部教授
- 平成19年 4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

メディア・コミュニケーション研究院教授

うえだ まさのぶ  
上田 雅信 氏



昭和60年4月に赴任し、31年間北大にお世話になりました。最初の1年間は古河講堂に研究室があり、授業や会議の度に現在の高等教育推進機構のある建物まで自転車で通ったことを懐かしく思い出します。

私は、1950年代の半ばに誕生した、自然科学としての言語研究を標榜する生成文法と呼ばれる分野の研究に携わりました。総合大学としての知的刺激に満ちた北大の研究環境で、日本語の統語論から言語の生物学的基礎や生成文法の概念的・哲学的基盤に至るまで、広い範囲の研究テーマに自由に取り組むことができたことは大変恵まれていたと感謝しています。生成文法草創期の思想的な背景を調べていた折に、北大の図書館の書庫には1950年代前後の欧米の心理学や哲学の重要な文献がほぼ揃っており、訪れる人を待っているかのように書架に静かに並んでいるのを見て感銘を受けたことを思い出します。

大学院が新設されてからは、指導学生とともにそれまでの専門分野とは異なる語用論の分野（ポライトネス理論、指示詞、関連性理論）の研究にも触れ、研究領域を広げることができたことも幸運でした。これまで皆様から様々な形でご支援をいただいたことに心から感謝いたします。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和28年 1月16日
- 昭和50年 3月 同志社大学文学部英文学科卒業
- 昭和54年 3月 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻修士課程修了
- 昭和55年 4月 小樽商科大学商学部助手
- 昭和60年 4月 北海道大学言語文化部助教授
- 平成 2年 9月 マサチューセッツ大学アマースト校大学院言語学科博士課程修了
- 平成13年 4月 北海道大学言語文化部教授
- 平成19年 4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授



## 保健科学研究院教授

はった たつお  
八田 達夫 氏



昭和51年に教育学部を卒業し、胆振管内の知的障害者施設に就職しました。7年間の勤務でしたが、その時の経験は現在の専門に進む原点になりました。作業療法士の資格を得るために、昭和58年に医療技術短期大学部に入学しました。卒業後、助手に採用され、その後、作業療法学、理学療法学の分野では初の4年制課程であった広島大学医学部保健学科に異動、平成16年に保健学科に戻りました。北大での教員生活は合計19年になります。

医療技術短期大学が設置された昭和56年は国際障害者年であり、その翌々年から「国連障害者の十年」が始まりました。リハビリテーションが一層の発展を遂げた時期でした。量的拡大は進みましたが、これからは質が更に問われてくると思います。現在取り組んでいる車いすシーティング研究は助手時代から始めました。北大に戻ってから車いす・オフィスチェアの製品化を進めましたが、博士課程の大学院生が積極的に取り組む中、研究としても発展させることができました。これからの超高齢化社会においては、高齢者が楽に座れて、生活機能も発揮しやすい車いす・いすが求められます。これにはいくらかの貢献はできたかと思えます。北大と保健科学研究院の一層の発展を祈念しております。

## 略 歴

生年月日 昭和27年7月2日  
昭和51年3月 北海道大学教育学部卒業  
昭和51年5月 社会福祉法人富門華会精神薄弱者更生施設富門華寮生活指導員  
昭和61年3月 北海道大学医療技術短期大学部卒業  
昭和61年6月 北海道大学医療技術短期大学部助手  
平成2年4月 北海道大学医療技術短期大学部講師  
平成6年4月 広島大学医学部講師  
平成9年4月 広島大学医学部助教授  
平成12年6月 博士(医学) (広島大学)  
平成14年4月 広島大学医学部教授  
平成16年4月 北海道大学医学部教授  
平成20年4月 北海道大学大学院保健科学研究院教授

## 工学研究院教授

ならばやし ただし  
奈良林 直 氏



民間企業の研究所で原子力発電所の安全性向上研究や、より安全性を高めた原子力発電所の受動的安全系機器システムの研究開発プロジェクトに27年間従事し、この間、国際会議で多数の専門家と知己を得ました。また、数多くの原子力発電所の不具合対応に従事し、それを解決して論文発表や論文投稿しました。人材育成の必要性を痛感し、平成17年に北海道大学に赴任しました。大学でも安全性を高めた原子炉の研究開発を推進しました。原子カルネッサンスと呼ばれる時代でした。しかし、平成23年3月11日の東日本大震災に起因する福島第一原子力発電所の事故が発生し、事態は一変しました。事故後5年経っても、未だに故郷に戻ることができず、避難生活を強いられている方々が大勢おいでになる状況です。原子力発電所の安全性を格段に向上させるように、国の委員会で発言すると共に、福島復興支援を進めて参りました。福島の被災者の方と30名でウクライナに行き、チェルノブイリ原子力発電所や首都キエフの放射線医学センターの病院を訪問し、東京で「福島復興シンポジウム」を開催致しました。福島の方々が幸せを取り戻すまで、専門家としての研究活動を続けたいと思っております。

## 略 歴

生年月日 昭和27年5月1日  
昭和51年3月 東京工業大学工学部卒業  
昭和53年3月 東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了  
昭和53年4月 } 株式会社東芝の研究所  
平成17年8月 }  
平成3年3月 工学博士(東京工業大学)  
平成17年9月 北海道大学大学院工学研究科助教授  
平成19年2月 北海道大学大学院工学研究科教授  
平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

ふるさか みちひろ  
古坂 道弘 氏



若い頃に英国オックスフォードの近くの町で約1年過ごしたことがありました。冬は本当に暗い時期で、12月に向けてどんどん日没が早くなります。そんな時期を乗り切るためにクリスマスがあります。日が落ちる時間と反比例してどんどん街がクリスマスに向かって盛り上がっていきます。日本の大学のガラパゴス的「定年儀式」はその盛り上がり思い出させます。「お年頃」になった教授たちは人が集まる場では「ご挨拶を」する機会がウナギ登りになります。委員会の委員になるのもお年頃の先生の御役目です。それが定年退職を境にがっくり減ることになります。人生80年を超えている現在、元気な年寄りたちはどうすればよいのでしょうか。何もしないのは勿体ないですが、後輩たちの活躍の場を奪うのもどうでしょうね。

そんな中で、私には実現できるかどうか分からない夢が一つあります。小学校に入る前の子供から、専門の研究者、100歳のお年寄りまで、世の中の現象を理解する助けとなる「一つと同じ教材(?)」を作ることです。私は若い頃の物理学を学ぶ過程で、「分からないこと(概念)」を「理解しよう」とすることをやめることができなくなり、結果的に研究者の道を歩んでしまったように思います。しかし、何が「基本の概念か」が見えてくると、物理も、あんなに大嫌いだった歴史も、スキーの滑り方も、料理も、掃除も、ファッションも、「渾然一体となった何か」で繋がっているように思えてきました。そんな「教材」ができたなら、きっと接した人の人生がとても豊かになるのではないかと、そんな妄想を抱いています。退職に向かって、ビッグバンに向かって、バクシン中です。



略 歴

生 年 月 日 昭和27年 5月31日  
 昭和52年 3月 東北大学理学部卒業  
 昭和54年 3月 東北大学大学院理学研究科博士課程前期2年の課程修了  
 昭和57年 5月 東北大学大学院理学研究科博士課程後期3年の課程単位修得退学  
 昭和57年 6月 東北大学理学部助手  
 昭和59年 4月 東北大学大学院理学研究科博士後期課程修了  
 昭和59年 4月 理学博士(東北大学)  
 昭和63年 4月 高エネルギー物理学研究所ブースター利用施設助手  
 平成 5年 8月 高エネルギー物理学研究所ブースター利用施設助教授  
 平成 9年 4月 高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所助教授  
 平成11年 6月 高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所教授  
 平成14年 4月 高エネルギー加速器研究機構大強度陽子加速器計画推進部教授  
 平成16年 4月 大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構大強度陽子加速器計画推進部教授  
 平成17年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授  
 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

スラブ・ユーラシア研究センター教授

いえだ おさむ  
家田 修 氏



私が30年前に北海道大学へ赴任したとき、まず思い浮かべたのは、私が大学院時代に学んだクラーク博士の教育指針です。博士は3つのことを教えたそうです。それは農学、キリスト教、そして軍事教練です。最初の2つは有名ですが、軍事教練はあまり知られていないかもしれません。当時の教程をみると、確かに兵式訓練の教科がありました。私の恩師によれば、軍事教練は単なる体力増強ではなく、独立自営の精神的鍛錬を目指すものだったそうです。それがアメリカ農民の精神でした。つまり、武器をとってでも自らと農場を守る気概です。軍事教練の教程は廃止され、時代は大きく変わりました。しかし、私の北大赴任時、自治を尊ぶ北大の気風は肌身で感じました。また先輩諸学が上下を問わず、自由闊達に議論をする校風に驚きました。この伝統を守ってゆくのが後学の使命だと考えました。

以来、4半世紀以上が経ち、平成26年に2度目の部局長就任という経験も踏まえて痛感するのは、今や大学の自治と良識が危殆に瀕していることです。大学ランキングや6年計画に振り回されず、老若男女が初心に立ち帰り、独立自営の自治精神に基づく、世界に開かれた大学を再建いたしましょう。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年 1月15日  
 昭和52年 3月 東京大学経済学部卒業  
 昭和60年 9月 東京大学大学院経済学研究科理論経済学経済史学専門課程第2種博士課程単位取得退学  
 昭和61年 4月 広島大学経済学部助手  
 昭和62年 3月 博士(経済学)(東京大学)  
 平成 2年10月 北海道大学スラブ研究センター助教授  
 平成 7年 2月 北海道大学スラブ研究センター教授  
 平成14年 4月 } 北海道大学スラブ研究センター長  
 平成16年 3月 }  
 平成26年 4月 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授  
 平成26年 5月 } 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長  
 平成27年 1月 }

人獣共通感染症リサーチセンター教授

すぎもと ちひろ  
杉本 千尋 氏

北海道大学には獣医学部、大学院修士課程以後、獣医学研究科准教授、人獣共通感染症リサーチセンター教授と27年にわたりお世話になりました。農林水産省の研究員時代にナイロビにある国際動物病研究所で3年間過ごしたのを契機に、アフリカの水になじんでしまい、本学教員となってからも科学研究費海外学術調査、国際感染症ネットワークプロジェクトなどでアフリカを中心として原虫病に関する研究活動を行ってきました。この間、多くの大学院生、博士研究員をザンビア、ウガンダ、南アフリカなどでの研究調査活動に連れ回し、海外大学の共同研究先にも放り込んできました。異色の指導方針だったかと思いますが、実験室にこもらない研究教育者を育ててきたことで本学や獣医学界に貢献できたのではないかと考えております。

4月からは特任教授として人獣共通感染症グローバルステーションの運営と感染症国際学院の立ち上げにも引き続き関わりますが、ザンビアを中心に展開する「顧みられない熱帯病対策プロジェクト」メンバーとしてアフリカトリパノソーマ症、いわゆる「眠り病」の研究にも力を入れたいと考えております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

## 略 歴

生 年 月 日 昭和27年8月22日  
 昭和51年3月 北海道大学獣医学部獣医学科卒業  
 昭和53年3月 北海道大学大学院獣医学研究科修士課程修了  
 昭和53年4月 } 農林水産省家畜衛生試験場  
 平成2年9月 }  
 昭和59年3月 獣医学博士（北海道大学）  
 昭和60年8月 } 農林水産省熱帯農業研究センター、  
 昭和63年9月 } 国際動物病研究所  
 平成2年10月 北海道大学獣医学部獣医学科助教授  
 平成12年11月 } 帯広畜産大学原虫病研究センター教授  
 平成17年9月 }  
 平成13年4月 } 岐阜大学大学院連合獣医学研究科教授  
 平成17年9月 }  
 平成17年10月 北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター教授、  
 北海道大学獣医学部獣医学科教授  
 平成25年5月 } 北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター長  
 平成28年3月 }

量子集積エレクトロニクス研究センター教授

さの えいち  
佐野 栄一 氏

雪がほとんど降らない地方に生まれ育った者が縁あって北大に職を得、月日が経つのは早いもので、この原稿を書く歳になってしまったのかというのが正直なところです。赴任当初は、経費・既存設備などの制約から民間研究所で行っていた研究を継続することはほぼ不可能で、新たな研究テーマの探索に腐心しましたが、頭を使って、外部資金で少しずつ計測器など研究環境を整備すれば良いと割り切りました。最近、未開拓な周波数領域であるテラヘルツ領域の研究に携わり、心踊るデータを学生たちが出してくれています。この研究領域にしても、持続可能な情報通信社会を創り出すためにもやるべきことは多く、残念ではありますが、次世代に委ねたいと思います。

前職時代のヒューマンネットワークが縁結びとなって、カーボンナノチューブに関して他部局（環境科学院）の先生と共同研究できたのは楽しい思い出です。専門分野の異なる方と協働すると、発想の違いに驚いたり、新たなアイデアが生まれたりするものです。個人レベルでも優秀な研究者が集まっている北大ですが、総合大学という強みをより活かすためには、学内の異分野共同研究をより活性化する必要があります。情報の流通が悪くて、発芽していない研究テーマがあるような気がします。

皆様方の益々の発展を祈念します。

## 略 歴

生 年 月 日 昭和27年12月4日  
 昭和50年3月 東京大学工学部卒業  
 昭和52年3月 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了  
 昭和52年4月 } 日本電信電話公社  
 平成13年6月 }  
 平成10年9月 博士（工学）（東京大学）  
 平成13年7月 北海道大学量子集積エレクトロニクス研究センター教授

北極域研究センター教授

さいとう せいいち  
齊藤 誠一 氏



昭和46年に本学水産類に入学して、学部、修士課程、博士課程と進学しました。昭和59年に博士号取得後、天気予報の財団法人日本気象協会で衛星情報サービス業務に関わり、10年程勤めた後に、平成5年に水産学部に助教授の職を得て赴任しました。以来、衛星リモートセンシングの漁業への応用を目指して、カツオなどの回遊魚の漁場予測に関する研究、さらには亜寒帯海域や北極海における気候変動への海洋生態系の応答研究を進めました。教育面では、漁業航海学講座を衛星海洋学講座へ変更して、衛星海洋学に関する授業を開始しました。衛星情報だけでなく、水産海洋地理情報システム（GIS）技術を活用した空間統計学を導入して、より定量的な漁場予測に関する研究とその社会実装までを行いました。本年までに直接指導した博士号取得者は、留学生8名を含む計23名です。私の研究の殆どは博士論文研究に負うところが大きく、共同研究者としての大学院生なしにはこれまでの研究は進展しなかったといっても過言ではなく、彼らに対して改めてここに深謝します。

退職1年前に新設の北極域研究センターのセンター長を仰せつかり、住みなれた函館から学士1、2年生を過ごした札幌に戻り感慨深いものがあります。退職後も引き続きセンター長（特任教授）として北極域研究センターの盤石な基盤作りに寄与してゆく所存です。

略 歴

生年月日 昭和28年2月16日  
 昭和50年3月 北海道大学水産学部卒業  
 昭和53年3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了  
 昭和56年3月 北海道大学大学院水産学研究科博士課程単位取得退学  
 昭和56年4月 日本学術振興会奨励研究員  
 昭和57年4月 財団法人水産科学研究奨励会研究員  
 昭和59年3月 水産学博士（北海道大学）  
 昭和59年8月 財団法人日本気象協会研究員  
 平成5年2月 北海道大学水産学部助教授  
 平成12年1月 北海道大学水産学部教授  
 平成12年4月 北海道大学大学院水産科学研究科教授  
 平成17年4月 北海道大学大学院水産科学研究科教授  
 平成27年4月 北海道大学北極域研究センター教授、  
 北海道大学北極域研究センター長

理学研究院准教授

かわむら まこと  
川村 信人 氏



昭和48年3月に北海道大学理学部地質学鉱物学教室の3年生に進級して以来40数年、そのあいだ紆余曲折が無かったわけではなく、また自己の資質に疑問を持った時期もありましたが、節目節目でなんとなく幸運な（都合のよい？）出来事が起きて、北海道大学でずっと地質学研究の道を歩むことができました。なにはともあれ定年退職ということになりましたが、自らの来し方を見詰めると、もっと他にやり方があったのではないかと、努力が足りなかったのではないかと…と忸怩たる思いです。

私の専門分野である「地質学」については、ある意味没落の時期でもありました。しかしその社会的な存在意義自体が揺らいでいるわけではなく、たとえその形は変わっていくとしても、自然科学の中で重要な立ち位置に居続けるのではないかと楽観しています。そのプロセスに自分に関わることはもうないのかもしれませんが、希望を持って見守っていきたいと思います。

略 歴

昭和50年3月 北海道大学理学部卒業  
 昭和52年3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了  
 昭和58年3月 北海道大学大学院理学研究科博士課程修了  
 昭和58年3月 理学博士（北海道大学）  
 昭和59年4月 } 日本学術振興会奨励研究員  
 昭和61年3月 }  
 昭和61年4月 北海道大学理学部助手  
 平成6年4月 北海道大学理学部講師  
 平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科講師  
 平成15年10月 北海道大学大学院理学研究科助教授  
 平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院助教授  
 平成19年4月 北海道大学大学院理学研究院准教授

## 保健科学研究院准教授

さかた もとみち  
坂田 元道 氏

北海道大学に赴任して10年の月日が流れ、いよいよ定年退職を迎えることとなりました。自分が大学の教員になることなど考えてもいなかった10年前でした。28年間にわたる病院での臨床経験を少しでも学生に伝えたいと大学の一般的な講義とは異なる講義を展開したつもりです。私の講義のどこか一部でも、学生さんが将来就職して社会人（診療放射線技師など）となった時に何らかの“脳のフェイント”になれば良いと考えております。

教育の素晴らしさは、人が人を育てるところにあると思います。これこそ人間にしかできない仕事という感じがします。学生は指導次第でどれほどまで伸びるもの、しかしながら、私の指導の未熟さのゆえになかなか思うようにいかないことも多かったと思います。教育がすばらしいことである反面、人間の一生に良かれ悪しかれ影響を与えてしまうという恐ろしさがあるのだと思います。

10年間、最高の教員生活でした！ありがとうございます。最後に皆様のご健康をお祈りして、筆を置かせていただきます。

## 略 歴

生 年 月 日	昭和27年10月2日
昭和50年3月	北海道大学医学部附属診療放射線技師学校卒業
昭和50年12月	札幌医科大学医学部附属病院診療放射線技師
平成14年3月	放送大学教養学部卒業
平成15年7月	デューク大学メディカルセンター研究員
平成17年9月	北海道大学医学部助教授
平成19年3月	博士（医学）（札幌医科大学）
平成19年4月	北海道大学医学部准教授
平成20年4月	北海道大学大学院保健科学研究院准教授

## 工学研究院准教授

ふじよし りょうこ  
藤吉 亮子 氏

昭和56年に札幌に移り住み、平成元年に北海道大学工学部助手に採用されて以来、北海道大学の広大なキャンパスで公私ともに充実した時を過ごしました。実際には、2年後（平成30年3月）に大学を去ることになりますが、自然環境が比較的多く残されたこのキャンパスそのものに、まず感謝したいと思います。そして、このような恵まれた環境で多くのことを学び、世界中に飛び立つ優秀な人材がこれからも数多く輩出されることを期待しています。

長い研究生生活の中でたくさんの人とめぐり合い、いろいろなサポートをいただきました。心から感謝申し上げます。

## 略 歴

生 年 月 日	昭和27年9月14日
昭和50年3月	群馬大学工学部卒業
昭和52年3月	名古屋大学大学院理学研究科博士課程前期課程修了
昭和55年3月	名古屋大学大学院理学研究科博士課程後期課程単位修得退学
昭和55年12月	理学博士（名古屋大学）
昭和56年1月	有限会社ライフサイエンス研究所
昭和56年7月	
昭和57年4月	北海道大学工学部非常勤講師
平成元年11月	北海道大学工学部助手
平成9年4月	北海道大学大学院工学研究科助手
平成19年4月	北海道大学大学院工学研究科助教
平成19年12月	北海道大学大学院工学研究科准教授
平成22年4月	北海道大学大学院工学研究院准教授

北海道大学病院准教授

まつうら とおる  
松浦 亨 氏



この度、長きにわたりお世話になりました北海道大学を定年退職することとなりました。

高校時代進路に悩み、生物物理学を志して回り道しましたが、医学進学課程へ入学しました。基礎医学を専攻しようとしていましたが「人がいっぱい」と断られ、ならば「分からない事が山のようにある」分野を専攻しようと、脳神経外科学講座のなかの田代邦雄先生率いる神経内科部門に飛び込みました。2年目、4年目でチーフレジデント、5年目で日本初の神経内科専門病院の立ち上げ、地域の中核病院での診療科開設など、ほとんど寝る暇もない毎日でした。今では160名を超えた道内の専門医も、当時は私で6人目でした。当時より、仕事を楽にするために工学部のご指導のもとネットワークを、獣医学部衛生学教室では分子生物学・ウイルス学を学ばせていただきました。いわゆる「日米貿易戦争」と呼ばれる時代に、文部省の依頼をうけ出向、外務省に転じ、日米交渉も経験しました。現職は病院長補佐として病院経営の安定とセキュリティの確保、新しく国際化のための医療通訳養成に従事しております。

退職後も特任として微力ながら任に当たらせていただきますが、これまでの多方面の皆様のご支援に感謝申し上げますとともに、北海道大学がより輝かしい未来を切り開かれますことを祈念して、退職の御挨拶とさせていただきます。

略 歴

生 年 月 日 昭和27年 8月 9日  
 昭和54年 3月 北海道大学医学部医学科卒業  
 昭和54年 7月 北海道大学医学部附属病院医員  
 昭和56年10月 } 民間病院  
 昭和62年 3月 }  
 昭和62年 4月 北海道大学医学部附属病院医員  
 平成 7年 4月 北海道大学医学部附属病院助手（文部省専門官待遇政府調達教官として出向）  
 平成 8年10月 外務省外務事務官（併）  
 平成10年 4月 北海道大学医学部助教授  
 平成13年 4月 北海道大学大学院医学研究科助教授  
 平成19年 4月 北海道大学病院准教授

財務部経理課長

おおひなた こうじ  
大日向 孝治 氏



昭和49年に千葉大学に採用され、その後は、北海道大学、室蘭工業大学、国立教育研究所、東北大学、弘前大学と9回転任し、42年間で、他大学が15年、北大での27年は、主に財務部が12年、北大病院が10年半、他に低温科学研究所、工学部とお世話になりました。この42年間、諸先輩、同僚、後輩、また先生方には、ことある毎にご支援ご指導をいただき、無事にこの3月をもって定年を迎えることができ、感謝の言葉もありません。

採用された頃は、ガリ版で原稿を書き、輪転機で印刷した時代でしたが、タイプライターと、ワープロは異動の度に6メーカーを扱い、今ではパソコンへと時代の流れと共に進化をし、何とか対応してきました。また、病院勤務も延べ16年半と長いことから、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災では北大病院医療ボランティアに参加して神戸に行き、同17年8月16日の宮城県沖地震では、東北大学病院で負傷した患者の受入れに奔走し、同23年3月11日の東日本大震災では、弘前大学病院でライフライン確保等の病院運営に携わったことも良い経験となりました。

ダーウィンの言葉で、『生き残れるのは変化に対応できる者』とあります。残りの人生、どれだけの変化に対応して生きていけるか、それもまた楽しみでもあります。

最後に、北海道大学の益々の発展とお世話になった皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。長い間本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年 7月 4日  
 昭和49年 5月 千葉大学人文学部  
 昭和52年 3月 千葉大学工業短期大学部卒業  
 昭和52年10月 北海道大学医学部附属病院管理課  
 昭和56年 5月 北海道大学低温科学研究所  
 昭和59年 5月 北海道大学工学部経理課  
 昭和60年10月 北海道大学経理部経理課  
 平成 2年11月 室蘭工業大学会計課  
 平成 5年 4月 北海道大学医学部附属病院管理課  
 平成 8年 4月 国立教育研究所庶務部会計課管理係長  
 平成11年 4月 北海道大学経理部第一契約課専門職員  
 平成13年 4月 北海道大学医学部附属病院管理課企画掛長  
 平成15年 4月 東北大学歯学部・歯学研究科業務課長  
 平成15年10月 東北大学病院医療サービス課長  
 平成17年 4月 東北大学病院医事課長  
 平成18年 4月 北海道大学病院医事課長  
 平成20年 4月 弘前大学医学部附属病院経理調達課長  
 平成21年 4月 弘前大学医学部附属病院経営企画課長  
 平成23年 4月 北海道大学財務部調達課長  
 平成24年 4月 北海道大学財務部経理課長

## 医学系事務部長

やまうち かずあき  
山内 一昭 氏

私は、釧路工業高等専門学校に採用となり、北大、旭川医科大学を経験させていただきました。どの部署も素晴らしいところではありましたが、私にとっての原点は、なんと言っても「北大人事課」です。そこでの経験が自分を決定づけたと思っています。自ら「四天王」と呼ぶ掛長とそれに対抗する「ペロペロ四銃士」と称する主任とが織りなす個性豊かな集団（雑種の垣塙）の中で、仕事への姿勢、ものの考え方、コミュニケーション能力、組織とは何かを学ぶ機会を与えていただきました。その中で一番の思い出は、寒冷地手当における一時本邦外の解釈をめぐる人事院北海道事務局とのやり取りです。当時、寒冷地手当は北大に聞けと言われるほどで、当方からの質問に対し人事院の担当係長が返答に窮し、「寒冷地手当は人事院規則ではなく総理府令なので解釈権はありません」と言わしめたことです。また、人事課で出会った良き同僚、後輩にも恵まれ「若人会」という親睦会から何組ものカップルが誕生したのは嬉しい限りです。

ここに、定年を迎えるにあたり、皆様方に感謝するとともに、次のエールを送ります。

法人化以降、事務局も部局事務も以前にまして業務が多忙化し、かつ、迅速性を求められ、加えて人件費の抑制も課せられています。事務系職員にとっては厳しい環境下ではありますが、出会いや経験を重ね、周りを思いやり、健康に気を付け、謙虚に、腐らず、常に前を向いて進んで行けば、明日はきっと、いい風が吹いてきます。

## 略 歴

昭和54年 6月 釧路工業高等専門学校  
昭和56年 9月 北海道大学  
平成 8年 4月 北海道大学水産学部庶務掛長  
平成11年 4月 北海道大学総務部総務課秘書掛長  
平成13年 4月 北海道大学総務部人事課能率掛長  
平成14年 4月 北海道大学総務部人事課任用掛長  
平成15年 4月 旭川医科大学総務部庶務課課長補佐  
平成17年 4月 北海道大学総務部人事課課長補佐  
平成19年 4月 北海道大学総務部職員課課長補佐  
平成20年 4月 北海道大学低温科学研究所事務長  
平成22年 4月 旭川医科大学総務部総務課長  
平成24年 4月 北海道大学総務企画部企画課長  
平成25年 4月 北海道大学医学系事務部長

## 歯学研究科・歯学部事務長

ふどう やすのり  
不動 康則 氏

昭和52年に北海道大学に採用になり、途中旭川工業高等専門学校での3年間の勤務を経て、この3月に定年を迎えることになりました。

20代の頃、工学部で化学系の先生や講座・学科所属の事務職員の方々と仕事をし、大変お世話になりました。また、医学部附属病院では医療系の先生や技術職員の方々に色々な教えを受けました。今思い起こすと至らないことが多々ありましたが、この若い頃の大部局での貴重な経験や様々な職種の方々との出会いが、その後の大学職員人生に大きな力を与えてくれました。

それから、医療技術短期大学部や触媒化学研究センターの事務部で多様な仕事に携わることができ、大学職員としての視野を広げることができました。

また、旭川高専から復帰後は、大型計算機センター勤務で情報基盤の重要さ、北方生物圏フィールド科学センター勤務で地方施設の役割や地域貢献の意義を勉強させていただきました。最後、情報科学研究科や歯学研究科で部局の管理業務に従事させていただき、部局運営の大変さも実感しました。

今までの部局事務部での素晴らしい経験や思い出が私の大切な財産になっています。このように多くの先生や職員の方々に支えられて定年まで職責を全うすることができ、感謝に堪えません。

## 略 歴

生 年 月 日 昭和31年 1月25日  
昭和49年 3月 北海道札幌啓北商業高校卒業  
昭和52年 7月 北海道大学工学部総務課  
昭和56年 5月 北海道大学医学部附属病院医事課  
昭和61年 4月 北海道大学医学部附属病院総務課  
平成元年 4月 北海道大学医療技術短期大学部  
平成 2年 4月 北海道大学医療技術短期大学部庶務掛庶務主任  
平成 4年 4月 北海道大学触媒化学研究センター総務掛人事主任  
平成 7年 4月 北海道大学医学部附属病院総務課人事掛任用主任  
平成 8年 4月 旭川工業高等専門学校庶務課人事係長  
平成11年 4月 北海道大学大型計算機センター庶務掛長  
平成14年 4月 北海道大学総務部人事課専門職員  
平成15年 4月 北海道大学総務部人事課福祉掛長  
平成16年 4月 北海道大学総務部職員課職員厚生掛長  
平成18年 4月 北海道大学施設部施設企画課施設企画係長  
平成19年 4月 北海道大学施設部施設企画課課長補佐  
平成20年 8月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター事務長補佐  
平成22年 4月 北海道大学工学系事務部総務課課長補佐  
平成23年 4月 北海道大学工学系事務部情報科学研究科事務課長  
平成25年 4月 北海道大学歯学研究科・歯学部事務長

農学事務部事務長

いわぶち てつや  
岩渕 徹也 氏



昭和53年4月に北海道大学に幸運にも採用され、本年の3月で定年を迎えることになりました。

北海道大学で31年、旭川医科大学と帯広畜産大学での7年間、通算38年に亘る大学での勤務の間、多くの良き先輩、同僚、後輩、先生方に恵まれ、皆様のご指導、ご協力、ご支援により大過なく過ごさせていただきましたことを、心より感謝申し上げます。

思い出されることはたくさんありますが、様々な職務を経験できた中、昭和から平成に変わり、2000年問題であたふたし、G8大学サミット開催業務や法人化のための業務を手探りで行ったことなどが強く心に残っております。

最後に、この4月から第3期中期目標計画期間が始まる節目の年になりますが、北海道大学の益々のご発展と、お世話になった皆様方のご健勝とご活躍を心からお祈りいたします。本当にありがとうございました。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和31年 2月10日
- 昭和53年 3月 明治大学法学部卒業
- 昭和53年 4月 北海道大学庶務部人事課
- 昭和56年 5月 北海道大学工学部総務課
- 昭和61年 4月 北海道大学庶務部人事課
- 平成 3年 4月 北海道大学理学部
- 平成 6年 4月 北海道大学庶務部庶務課
- 平成 7年 4月 北海道大学総務部総務課
- 平成 8年 4月 旭川医科大学総務部庶務課係長
- 平成12年 4月 北海道大学総務部人事課掛長
- 平成15年 4月 北海道大学総務部人事課専門職員
- 平成16年 4月 帯広畜産大学企画総務部総務課課長補佐
- 平成19年 4月 北海道大学学務部学生支援課課長補佐
- 平成19年12月 北海道大学学術国際部国際企画課課長補佐
- 平成21年 4月 北海道大学メディア・観光学事務部事務長
- 平成23年 4月 北海道大学北キャンパス合同事務部事務長
- 平成26年 4月 北海道大学農学事務部事務長

北海道大学病院診療支援部長

ほり きょういち  
堀 享一 氏



私は理学療法士及び臨床工学技士として民間の病院で就労したあと、平成11年4月より北海道大学医学部附属病院に理学療法士として入職いたしました。当時、北海道大学病院は国立大学で数少ない「リハビリテーション医学講座」とリハビリテーション科専用病床を有する大学病院として注目を集めており、そういった職場で働くことに大きな緊張と意欲を感じていたことを覚えています。

平成16年度からの国立大学法人化を前にした平成15年10月より、北海道大学病院に医師・薬剤師・看護師等を除く医療技術系職員を一元的に組織する「診療支援部」が設置され、その業務に関与することになりました。診療支援部は設置後12年間を経過し、職員数は設置時の約2倍の240名を超え、12職種の多様な職員が多彩な臨床場面で働いています。国立大学法人化以降の変動は、種々の医療環境の変化もあいまって、北海道大学病院に大きな変動をもたらしたと思いますが、変化を続ける環境のなかで周囲の方々のご援助をいただきながら定年退職を迎えることができました。この場をお借りして感謝の気持ちをお伝えすると共に皆様のご多幸をお祈りいたします。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和31年 3月31日
- 昭和53年 4月 } 民間病院
- 平成11年 3月 }
- 昭和53年 6月 室蘭工業大学機械工学科卒業
- 昭和63年 3月 名古屋大学医療技術短期大学部理学療法学科卒業
- 平成11年 4月 北海道大学医学部附属病院理学療法部主任理学療法士
- 平成15年10月 北海道大学医学部・歯学部附属病院診療支援部副診療支援部長・理工部門技師長
- 平成26年 4月 北海道大学病院診療支援部長



## 北海道大学病院看護部長

かわはた  
川畑 いづみ 氏



昭和52年北海道大学医学部附属看護学校卒業以来、39年を北海道大学病院でお世話になりました。循環器内科病棟、小児科病棟、外来、放射線科検査室、眼科病棟、脳神経外科・神経内科病棟、看護部を経験いたしました。この間、患者さんやご家族から沢山の人生を学び、看護を深く考える機会をいただきました。また、諸先輩や同僚からの教えに支えられて大好きな職業を定年まで続けられたことに感謝しております。看護部長としての8年間は北海道大学第2期中期計画の中にあり、病院経営の安定、高度医療提供を担う専門性の高い看護職の育成、チーム医療を目標に看護部の組織づくりを行ってきました。残された課題はありますが、バトンを繋ぐ区切りは付けられたと思っています。

最後に、北海道大学病院は、診療・教育・研究において最先端を走り続けることでしょう。その一翼を担うであろう若い看護師たちが医療の進歩・社会情勢の変化を柔軟に受け止め、チーム医療のキーパーソンとして看護を発展していただくことを期待しております。

長い間、大変お世話になりました。誠にありがとうございました。北海道大学、そして北大病院の益々の発展を心からお祈りしております。

## 略 歴

生 年 月 日 昭和30年 5月12日  
 昭和52年 3月 北海道大学医学部附属看護学校卒業  
 昭和52年 4月 北海道大学医学部附属病院看護部  
 平成 3年11月 北海道大学医学部附属病院看護部副看護婦長  
 平成 6年 4月 北海道大学医学部附属病院看護部看護婦長  
 平成11年 4月 北海道大学医学部附属病院看護部副看護部長  
 平成17年 3月 北海道医療大学大学院看護福祉学研究所修士課程修了  
 平成20年 4月 北海道大学病院看護部長

## ■ 諸会議の開催状況

---

### 役員会（平成28年 2月 8日）

- 議案・クロスアポイントメントの適用について
- ・特任教員等の基本年俸の検証について
- 協議事項・平成28年度以降の本学記念日及び開学記念行事日に係る取扱いの変更について
- ・改組に伴い一時的に複数専攻の専任教員となるための弾力措置について
  - ・全学運用教員の措置について
- 報告事項・平成27年度施設整備事業（追加予算分）について
- ・北海道大学総合研究棟（工学系）新営工事について
  - ・機能強化経費「機能強化促進分」における評価結果について
- 

### 教育研究評議会（平成28年 2月17日）

- 議題・平成28年度以降の本学記念日及び開学記念行事日に係る取扱いの変更について
- ・改組に伴い一時的に複数専攻の専任教員となるための弾力措置について
- 報告事項・全学運用教員の措置について
- ・大学文書館の現状と国立公文書館等の指定について
- 

### 役員会（平成28年 2月22日）

- 議案・ハラスメント相談体制等の見直しについて
- ・平成28年度以降の本学記念日及び開学記念行事日に係る取扱いの変更について
  - ・改組に伴い一時的に複数専攻の専任教員となるための弾力措置について
  - ・就業規則関連規程の一部改正について
  - ・国立大学法人北海道大学職員給与規程等の一部改正について
- 協議事項・サバティカル研修制度の見直しについて
- ・就業規則関連規程の一部改正について
- 

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

## ■ 学内規程

---

### 国立大学法人北海道大学役員給与規程の一部を改正する規程

(平成28年2月23日海大達第14号)

国立大学法人法第35条の規定により準用される独立行政法人通則法第50条の2第3項の規定を踏まえ、役員給与について、社会一般の情勢に適合したものとし、かつ、国家公務員の給与水準を十分考慮して国民の理解が得られる適正なものとするため、本給月額及び勤勉手当の支給割合の見直しを行うことに伴い、本給月額及び職員給与における勤勉手当相当分が含まれている役員給与の期末手当について、所要の改正を行ったものです。

---

### 国立大学法人北海道大学職員給与規程等の一部を改正する規程

(平成28年2月23日海大達第15号)

国立大学法人法第35条の規定により準用される独立行政法人通則法第50条の10第3項の規定を踏まえ、職員の給与について、国家公務員の給与等、民間企業の従業員の給与等、本学の業務の実績並びに職員の職務の特性及び雇用形態その他の事情を考慮し、国民の理解が得られる適正なものとするため、基本給月額、初任給調整手当及び単身赴任手当の月額並びに勤勉手当の支給割合の見直しを行うこと並びに独立行政法人大学評価・学位授与機構法の一部が改正されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部を改正する規程

(平成28年2月23日海大達第16号)

札幌市から認可保育園に対して交付される補助金における人件費の算定については、国家公務員の給与を参考として算定されていることから、当該補助金の額を考慮しつつ、職員の給与について社会一般の情勢に適合したものとし、かつ、国家公務員の給与等、民間企業の従業員の給与等、本学の業務の実績並びに職員の職務の特性及び雇用形態その他の事情を考慮し、国民の理解が得られる適正な給与水準とするため、職員が受ける基本給月額を引き上げること及び勤勉手当の支給割合を見直すことに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 国立大学法人北海道大学契約職員就業規則等の一部を改正する規則

(平成28年2月23日海大達第11号)

---

### 国立大学法人北海道大学嘱託職員就業規則の一部を改正する規則

(平成28年2月23日海大達第13号)

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考慮し、勤勉手当の支給月数の見直しを行うこと等に伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園臨時職員就業規則の一部を改正する規則

(平成28年2月23日海大達第12号)

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部改正に伴い、当該規程の適用を受ける職員との均衡等を考慮し、勤勉手当の支給月数を引き上げることに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 国立大学法人北海道大学ハラスメント防止規程の一部を改正する規程

(平成28年2月23日海大達第17号)

本学におけるハラスメント防止に係る体制の見直しに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 国立大学法人北海道大学国際本部規程の一部を改正する規程

(平成28年3月1日海大達第18号)

---

### 国立大学法人北海道大学高等教育推進機構規程等の一部を改正する規程

(平成28年3月1日海大達第19号)

平成28年3月1日付けで、国際本部の留学生センターをグローバル教育推進センターに改組すること及び国際本部にインテンシブラーニングセンターを設置することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学法人文書管理規程の一部を改正する規程

(平成28年3月1日海大達第20号)

国際本部の留学生センターをグローバル教育推進センターに改組すること、本学におけるハラスメント防止に係る体制の見直しを行うこと及び独立行政法人大学評価・学位授与機構法の一部が改正されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

(平成28年3月1日海大達第21号)

本学のオープンファシリティについて、設備の追加、削除及び使用料の変更を行うこと並びにオープンファシリティを使用しようとする者は、別に定める申請書により管理責任者に申請することとするに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学創成研究機構グローバルファシリティセンター分析・加工受託規程の一部を改正する規程

(平成28年3月1日海大達第22号)

創成研究機構グローバルファシリティセンターにおいて、材料加工に使用する設備の追加を行うこと及び加工等料の変更を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

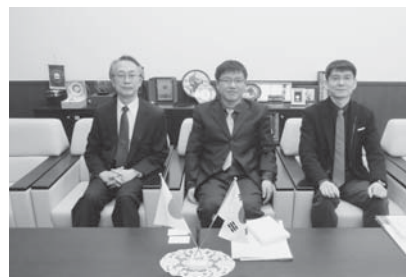
■ 表敬訪問

海外

年月日	来訪者	来訪目的
28.2.4	ラチャパット・マハーサーラカム大学 (タイ) Somchai Wongkasem 学長	両大学の交流に関する懇談
28.2.5	釜山大学校 (韓国) Bog G. Kim 自然科学部物理学科 教授	両大学の交流に関する懇談
28.2.9	サバ大学 (マレーシア) Tun Zaki 理事長	両大学の交流に関する懇談



ラチャパット・マハーサーラカム大学 (タイ)  
Somchai Wongkasem 学長 (前列中央)



釜山大学校 (韓国)  
Bog G. Kim 自然科学部物理学科 教授 (中央)



サバ大学 (マレーシア)  
Tun Zaki 理事長 (中央)

(国際本部国際連携課)

# ■人事

平成28年2月29日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	早 川 輝 NA HANNA	大学院医学研究科助教 大学院理学研究院助教
【技術職員等】 (辞職)	池 本 舞 関 谷 沙 希	北海道大学病院薬剤部薬剤師 北海道大学病院薬剤部薬剤師

平成28年3月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 大学院地球環境科学研究院教授 国際本部グローバル教育推進センター教授 国際本部グローバル教育推進センター教授 国際本部グローバル教育推進センター教授 国際本部グローバル教育推進センター教授 国際本部グローバル教育推進センター教授 (転出) 東京工業大学大学マネジメントセンター教授	鈴 木 仁 小 林 由 子 SEATON PHILIP ANDREW 高 橋 彩 山 下 好 孝 中 島 岳 志	大学院地球環境科学研究院准教授 国際本部留学生センター教授 国際本部留学生センター教授 国際本部留学生センター教授 国際本部留学生センター教授 大学院公共政策学連携研究部准教授
【准教授】 大学院工学研究院准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授 国際本部グローバル教育推進センター准教授	高 橋 航 圭 青 木 麻衣子 伊 藤 孝 行 小河原 義 朗 COOK EMMA ELIZABETH KLIEN SUSANNE 佐々田 博 教 鄭 惠 先 中 村 重 穂 FIRKOLA PETER 山 田 悦 子 山 田 智 久	採用 国際本部留学生センター准教授 国際本部留学生センター准教授 国際本部留学生センター准教授 国際本部留学生センター准教授 国際本部留学生センター准教授 国際本部留学生センター准教授 国際本部留学生センター准教授 国際本部留学生センター准教授 国際本部留学生センター准教授 国際本部留学生センター准教授
【助教】 大学院工学研究院助教 電子科学研究所附属社会創造数学研究センター助教 国際本部助教	北 島 正 章 JUSUP MARKO WAKEMAN KEVIN CHRISTOPHER	採用 採用 採用
【専門職 (学術)】 国際本部学術専門職	川 端 千 鶴	採用

## 新任教授紹介

平成28年3月1日付



地球環境科学研究院教授に

すずき ひとし  
**鈴木 仁 氏**

環境生物科学部門  
生態遺伝学分野

### 生年月日

昭和31年12月4日

### 最終学歴

神戸大学大学院自然科学研究科博士課程修了（昭和60年3月）  
博士（学術）（神戸大学）

### 専門分野

分子系統地理学

## 編集メモ

---

●3月になり，日中は暖かくなる日が徐々に増え，キャンパス内の雪解けも進んでいます。

●平成25年10月に就任した東京オフィスの福地光男所長が，この3月で退任となりました。東京オフィスを訪れた

学生と懇談したり，文部科学省等での会議を傍聴して情報を収集したりと，東京オフィスの運営にご尽力いただきました。福地所長，2年半ありがとうございました。



2015.3.14 千歳線 白石～苗穂（札幌市）

## 北の鉄道風景 36 ディーゼル機関車DD51

鉄道というインフラストラクチャが我が国の明治時代に誕生してから1950年代に至るまで、各種列車の主たる動力源は蒸気機関車であった。煙害が問題となる蒸気機関車をディーゼル機関車などに置き換える「動力近代化計画」が当時の日本国有鉄道において1960年から実行された。それに伴って開発されたのが、写真のディーゼル機関車DD51である。この機関車は1962年から1978年にかけて649両製造され

て、日本各地の路線で活躍した。その後、国鉄の分割民営化を経て道内の旅客列車の牽引を担当したのがJR北海道函館運輸所に配備されたDD51である。北海道新幹線の開業によって、その勇姿が見られるのも今月で最後となる。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ③ No.744 平成28年3月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html